

塔柳川

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和四十七年一月二十五日 印刷
 昭和四十七年二月一日発行（毎月一日発行）
 創刊大正十三年 通卷五三七号



No. 537

二月号

〈朝鮮人蔘〉の効用



の伝統をもつ朝鮮人蔘が

この宇宙時代に

すぐれた薬として欧米でも

再認識されています

「ヒヤク」は

この朝鮮人蔘の

有効成分をそくくり

カプセルにつめた

現代人の薬です



朝鮮人蔘エキス製剤

ヒヤク

45カプセル・90カプセル・300カプセル

カプセル

- 体力を充実させたい方
- 疲れがとれにくい方
- 貧血・冷え症の方
- 老化現象の方
- 胃腸の弱い方



山之内製薬株式会社
東京日本橋本町2-5

川柳塔社同人の

胸にかがやく

シンボル・バッジ



一個五百円（桐箱入り）

送料本社負担

純良医薬



第一製薬

うちみ・肩こりに

べタンと貼るだけ！

〈新型バップ剤〉

パテックス



● 140mm × 100mm Ⅱ 3枚入

地下街オープン先住の兎へ仁義切り

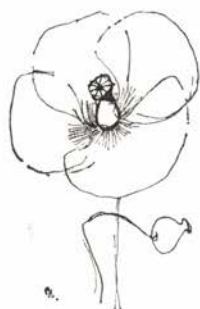
屠蘇は厳禁 救急車の詰め所

追われる羊の貌暮れの街に群れ

お国自慢そのふるさとを遠く居る

西大谷元旦としてのただずまい

中島生々庵



か つ ぎ

或る世話好きが、開運暦という本を持って来て、今年のあなたの運勢は、出世街道を高級車に乗って幕進するという大吉運で油断や不注意さえなければ大成功疑いなしですぞと教えてくれた。縁起のいい話で、とにかく楽しい事だ。総理大臣でも八の日とか大安は好きと聞いているし、いろいろかつぐ仁も居る。句会などに出て49とか89とかをさけて靴箱の番号を探すのを見る事がある。しかしその姿を一がいには笑えない。那須与市が一本の矢に絶対絶命を托した真剣さから言えば茶

柱一本でも気になるのが当然だからである。ところで、私は元旦京都の西大谷廟に詣でた。運転士を轎うつもりで境内の喫茶店でぜんざいを食べて帰路についた。五条通りを西へかなり来た頃、今の茶店に写真機を忘れて来たのに気付कि大急ぎで引き返す。車寄せの所で車を駐め、私は車内で待ち、運転士は店に走った。これは今年の運の初だめしだわいと頭の中をちらり横切るものがある。やがて写真機を持った運転士がにこにこ帰って来た。

川柳塔二月号

座右の句

春日遅々として仁王さんねむくむり (白柳)

私の句

貸傘が親類回りして戻り

城 一舟

川柳塔二月号目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

かつぎ

川柳塔……(同人作品)

柳運

川柳の美

川傍柳初篇研究……(百三)

前田喜代人・故岡崎重義・清川端柳風・故高須唾三味・丸

博美・藤井和雄
十府・岡田甫

「旅人」以後の麻生路郎作品……(14)

鬼百吟の弁

近作柳樽

東京宿酔

秀句鑑賞……(同人吟)

(近作柳樽)

近詠……

中島生々庵選……(1)

本田恵二朗……(2)

戸田古方……(26)

傍島静馬……(28)

菊沢小松園……(28)

川村好郎選……(30)

東野大八……(24)

正本水客……(42)

浜田久米雄……(43)

諸家……(27)

柳運

本田恵二朗

柳運という言葉を作って、こどもみたいに喜んでゐる私です。四十四年度の路郎賞を頂いたのが柳運の開き初めでしたが、その一句を私の所属するライオンズCが、或る祝事の記念品にとて、木彫漆芸の額に仕上げることに六百人、それを知事さん、市長さんはじめ県内県外の名士諸氏に贈呈されて、玄関や応接室に掲げて頂くという光栄に浴しました。

また昭和四十五年新緑の頃に、或る会社の庭に、私の知らぬ間に、句碑にして下さって私は感激してしまいました。昭和四十六年勤労感謝の日に、またまた句碑に成ってデビューしました。

ライオンズCの奉仕事業の一環として、岡山県立児島高等学校の正門のところに建てられまして、登校下校の男女生徒諸君は、否応なしに見させられ読まされることになってしまいました。贈呈の目的は、ライオンズCのスローガンである「青少年に愛と希望を」を實現する手段として建立されたものです。贈呈式で校長さんは、たくみな解説を加えて、生徒諸君に披露して下さい、私は感泣する思いでした。故路郎先生は「一句を残せ」という名言を唱えておられますが、どうやら一句

川柳五十三次：(十七)

富士野鞍馬 (40)

老人の日記より

麻生葭乃 (21)

利用価値

高鷺垂鈍 (21)

梅

西尾栗 (41)

川岡靈眼子逝く

川岡美須栄 (39)

雅号ぶっちゃげばなし

高杉鬼遊 (36)

堺つれづれ草発刊記念

宮西弥生 (63)

酒

吉岡青香 (41)

初歩教室

不二田一三夫 (51)

大萬川柳「初耳」

本田恵二朗 (48)

柳界展望

川村好郎選 (50)

本社一月句会

(薫風) (庸佑) (52)

各地柳壇

(文秋) (54)

一路集

「非常ベル」
「赤」
「産」
「院」

辻圭水選 (46)

編集後記

石坂新雪選 (47)

石川侃流洞選 (46)

(一三夫・葉子) (65)

座右の句

浮草は浮草なりに花が咲き

(生々庵)

私の句

現実に戻ればひとり風の音

藤岡花梢



を残せたような気になって、路郎先生のご恩にいささか報いたような気にもなっております。

足跡がほんとに残ったうれしい日

染筆は、高名な書道家で書道芸術院で審査員であられる三宅素峰先生がやって下さいました。石材は香川県の庵治産です。庵治石はとてみこまかく固いこと無類ですので、幾百年たってもこわれる心配はありません。苦蒸してくれる日もある句碑をなで

長い年月川柳と暮していますと、こんな柳運に出会うこともあるのだと言いたい私です。とんだ自慢げなことを書いてしめて、誌面を汚しましたが、たった一度だけの自慢だと思って、今回だけは、笑ってお許しを願いたく存じます。



中島生々庵選

一年の計を二月で練り直し

岡山県 浜田久米雄

戦争のない日本で愚痴を言い

反対派少ないと見て決をとり

十二月小さな義理は聞き流し

晩酌の酔いがニュースへ抗議する

門真市 福島鉄児

ふり出しへ戻る家裁の案をのみ

死ぬことも予定に入れる歳になり

別々に布団を敷いて背を向ける

炎え切ったカンナにも似て窓破れ

適令期父ちゃん一体どうする気

宇部市 平田実男

追風へズボンのほころび教えられ

新築の車庫へ新車が欲しくなり

煙の出ぬ煙突真昼の月に似る

三カ日日記は酒の字で埋まり

塀築いてからはしっくりせぬ隣

高槻市 若柳潮花

羽子板を松屋町まで値切りに来

舞い扇宴会ものになる師走

紙治でも立たせて見たい格子の灯

水客、紫香君と遊ぶ(二句)

仰向けば降って来そうな星の数

銚子三本男三人もてあまし

京都市 松川杜的

空っ風ああ正月のない務め

風やコマもうお正月の唄でなし

一生の不出来チャネルの合わぬ妻
老後安泰五葉の松に座す

湯葉料理待つ間を庭の鯉に佇ち

大阪市 小出智子

退院へ師走俄にやってくる

病床に足さし入れて子が眠り

病床の焦りへ句集ひもといて

寒波ひとたび病後をちぢこませ

小鳥のひながかえって母の気が晴れる

豊中市 戸田古方

そこからは理くつでついていけぬなり

嘲笑のやり場に困り淋しゆなり

極限に来て抵抗を感じない

虚仮ということばの響きにハツとする

みんなぐるぐる廻わったままにいる静止

大阪市 本多柳志

業者とは悲し社長の黒田節

母と娘で違うリズムも台所

古稀をまだ働かされる草鞆

PPM覚えて都会住みにくし

出雲路

湖をよごしてビルの美しさ

大阪市 太田良子

父ちゃんの帰り待てずに封を切り
顔に塗るレモンと知らぬレモンなり

角砂糖も一つと知ってる仲であり

かしこまっているのにきゅうきゅう靴が鳴り

聞きようでこうも話が進むもの

富田林市 岩田美代

仇野念仏寺にて(三句)

ぼんやりとしに來ただけの古い寺

野仏も何かをすねて前かがみ

柿落ちる余韻を背に寺を去る

空虚感南京豆はかんの底

田の杓火思い出しては炎え上がり

島根県 堀江正朗

老いの身のネックレスなる守り札

負けまいと思えど年が冬の音

手さぐりの慌てた後の孤独感

同病の同じ呼吸で話し合う

米子市 八木千代

残り葉も枯れてやすらぎ樹に戻り

還るものすべて包んで冬の土

ダム今日は生家の跡が浮く水位

どちらにも弱味示談にほっとする

行き着いたところ静かなペンとなる

笠岡市 木山 遠二

病気せぬ薬をあれもこれも飲み

日日好日とは閑人の言えること

正直なのも変人の数に入れ

綻びを繕う針か錆びている

薄倖なかわりのように長命な

宝塚市 傍島 静馬

折込みが主婦を惑わす十二月

老妻にまだ妬くほどの血が残り

ここだけの話に飛び付く儲け口

パパパパと顔色見てはこき使い

アタマが無いから牀で稼ぐ

大阪市 宮尾 あいき

一人きりのバス降りしなに礼を云い

白痴の娘銀杏の落葉を飽かず掃く

長病みの父へ長寿のかげぶとん

若者の闘志に免じてピラを読む

寒に耐えて咲くバラゆえの清らかさ

堺市 吉田 圭井堂

貧富の差がひど過ぎて働けず

気の遠くなる予算です他人の金

古稀へ来て知らざることの多かりき

効目見ぬうちに替った袖の下

街角に住んでサイレンぼけとなり

島根県 藤井 明朗

神の怒りに触れん山崩るる日

もつれ糸解かずにつづり別れする

幸せを呼ぶ新春ときめて寝る

お隣りの事故へ保険の値ぶみする

新春のプラン財布はあと回わし

京都市 都倉 求芽

面白くない真相よりも嘘が売れ

横文字が読めてつまらぬものを買い

石畳こつこつこつと人を恋い

今もってすぐ捨てられぬ戦中派

芳香の主を見回すエレベーター

奈良県 石倉 旅風

風鈴をしまい忘れているやり手

新婚の向いに座わり独り旅

人生は然り而して独り旅

乗りおくれ同士呑気に笑い合い

さて会えば僕はポツンと話下手

鳥取県 河村 日満

九州方面旅行（二句）

まだこんなところあり日本の中の阿蘇

日本も広いとおもう旅五日

雨滝にて

その上に栗をもらつてきた視察

大山にて (二句)

雨かすみ関は寝ているような昼

紅葉へ詩人としての眼を問われ

大阪市 児島与呂志

その辺の妥協のずるさを知つて居り

言葉尻取らえ人間露出する

その裏の裏を知つてゐる阿呆らしさ

嫌らわれてゐる女だから追いつづけ

酔いがまた大正生まれの愚痴になり

尼崎市 黒川紫香

籠坊温泉から篠山へ

バス去んで籠坊静かな湯に戻り

ポタン鍋しみじみ冬の冷えを知る

ふと休む山蔭げ地蔵さまおはし

三人の音サクサクと山の径

燃え残る紅葉に茶畑みどり濃し

米子市 林瑞枝

旅の帰途夕餉の献立買うも主婦

娘の見合い破談となつた日の安堵

学者めく顔で除草のはかどらず

邸宅の孤愁テレビの声と住み

疎外感消えて酒席の唄に酔い

大阪市 正本水客

彦根城見上げる水に秋沈む

ユズの里秋にまじつて冬がゐる

枯草の匂いを消しに雪がくる

木の葉落ちつくして大きな空がある

尾瀬の平野さん遭難

庭先のふぶき自然にかえる色

岸和田市 高橋操子

ゲバ棒の主と思えぬ顔かたち

遊ばせる土地へ柿の木みかんの木

鍵かけて孫の大事な宝箱

ことわざに反し子孫の為に買う

いっそもうかずにしなと云うプラン

大阪市 大坂形水

会つて見たいひと居る駅へ下りてみる

偶像にされた男と笑い合い

中年の男脱出考える

女名の封筒バーの請求書

応接へ通した婦人は保険なり

とは知らず髻棧敷で顎を撫で 高槻市 福田丁路

催促をされて借金思い出し

左右から何か知らんがピラを呉れ

ご先祖の苦勞思わず土地を売り

びわ湖竹生島觀音參詣

曇り後晴れて紅葉の竹生島

松江市 中川 晃 男

懸命に生きる師走の向かい風

今年の傷に沁み来年に燃える酒

口ばかり達者神経痛冷える

人様に分ける涙を残してた

たかぶってやがてさびしい冬の酒

竹原市 山内 静 水

裏へ回れば裏へ來てる犬

手ぐすねをひいて小言を浴びせられ

道ならぬ恋ノ一ネクタイの似合う方

どうしてどうしておんなのすきだらけ

同じもの食べて夫のあばら骨

青森市 工藤 甲 吉

ひがんでる男と男ウマが合い

心臓が一瞬とまる人にあい

うちの方の会社にもあるゴマスリ器

風船がしぼんだように余生を居

小切手をかわいこちゃんに書かせられ

岡山県 直原 七面 山

一泊旅行で愛のだめ押し

のろけと知らず 別れる別れる

口論の相手へ夜泣きそばを取り

いつからか手酌ですます癖がつき

野心捨ててからはぐっすりよく眠れ

大阪市 山川 阿 茶

金になる重い患者は他所へやり

くだ菊の白が故人に似た風情

繰り上げも本番もある七五三

養老院人ごとならず話きく

卒業式すめばバイトのひまをとり

東京都 増田 次 章

人間の知恵新しい年を持つ

コンピュータ時代判こまだまだ幅きかす

舗装路も快適自然破壊も気にかかり

朝刊の運勢夕方には忘れ

ネンネコに生活を見せ若い母

愛媛県 村上 旭 童

金もないのが女くどいてどうする気

名目はどうにでも酒に酔い

老人の足をせかせる犬を連れ

またしても話題に合わぬ僕一人

盆栽でない大木が育てたし

貝塚市 野坂 つき 子

ミシンカタカタ破れたハート縫い合わせ

出雲市 原 独 仙

その先きを云えば貴方が逃げそうで
出る釘が打たれつばなしでない世代

あの人が選ってきそうな地平線
不況下もジングルベルは遠慮せず

倉敷市 小 野 克 枝

へそくりの出来ぬ女の丸い顔

高槻市 山 田 季 賛

年賀状だけは続いて四十坂

コンパクト震わせ愛に背を向ける

半分に聞いても整い過ぎる嘘

好きな人だから煙幕張っておく

大阪市 吉 岡 美 房

倒産の社長に邪魔な太い腹

消耗品並みにスターがつくられる

火えん瓶持てと両親育てしや

コップ酒両掌に包み明日がない

速やすぎて又生き難き年を越す

堺市 河 内 天 笑

ジェット機の尾灯もまじる星月夜

抱擁の肩越しに見た流れ星

もうほかの事考えてはる指の先

ドル・ショックおかげで女と切れました

ゲレンデの雪はつめたいものでなし

よく稼ぐ夫に仕えよく費い

対等の労資で労は言いよどみ

滝登りしても見たかる池の鯉

一着はうちの子顔中皺にする

横断をしゃんと渡った千鳥足

口笛も軽く思い通りに事運ぶ

子の意見素直に聞ける僕も老い

日曜日のゴミ焼き妻の指示を受け

言い訳がばれてる公休日

僕の家にも秋が来ていた植木鉢

八尾市 高 杉 鬼 遊

風吸えば虫歯が痛む十二月

いのちより長持ちしそうな義歯を入れ

紋章の如く折詰みかん座す

めがね重たく冬日の中を父帰る

はるばると柳葉魚は子持のまま焼かれ

大阪市 金 井 文 秋

正月を待つ子も居らず暮静か

不況に儲けて新聞記事になり

散髪をいやがらぬ子でたよりなし

植木鉢にされた火鉢のなれの果て

皮算用の額へボーナス届きかね

大阪市 河野君子

十二月多用な貌で旅にいる

安らぎが円座となりし実家の灯

注射あと余生の原点とも見えて

夜行列車毛皮の値ぶみしてあかず

年の瀬に観劇券をもて余まし

倉敷市 本田恵二朗

値を聞いてへエーと見直す錦鯉

元宮と円座つくつてあがり気味

シヤム猫を上座にすえて老夫婦

句碑除幕

足跡がほんとに残ったうれしい日

苔蒸してくれる日もあろ句碑をなで

大阪市 天正千梢

よりもどすつもりサービス過剰なり

うかうかとしてしきたりに流される

限界が分かりゆっくり深呼吸

水ましの受取り二号のお気に召し

師走まで枯葉のように流れつき

岡山市 川端柳子

口下手が善人だとは限らない

くじゃく羽ひろげるまでの美をじらし

そこまですめば何でもない話

しあわせの陽だまりやがて嫁が来る

寿命とは(秘)で迫るからいとし

和歌山市 垂井葵水

とある夜の謀反にかけるサン格拉斯

ポルノ篇見てクリスマスイブの街

本人はもう忘れてたスキヤンダル

拾うものなかった道の長いこと

蟻の道たどってヒマな日曜日

倉敷市 野田素身郎

妥協しておいて次善を考える

難問を持ち越し忘年会静か

白髪ふえただけで今年も暮れんとす

便乗をしたばかりに遅刻する

来客へ最後の一万円札崩す

神戸市 仲どんたく

底辺に住み赤旗も振れぬ暮

怨念の凝結とかや平家蟹

恩返し出来たとインタービュの息

めぐまれし老人同土朝の山

数寄屋風連れ込み宿もある京都

平田市 久家代仕男

油断しみじみ悔いてる車椅子

白鳥も見切りをつけた水の色

北風に呼びとめられる焼芋屋

年の瀬というに無口な台所

山脈の神秘そこねて縦断路

八尾市 香川 酔々

生きていく穴をもぐらは掘り続け

裏通りですとは地図に書いてなし

九州弁大阪弁に顔を出し

白衣まだ聞かしてくる苦い唄

バックカスも三輪明神も飲み仲間

大阪市 橘 高 薫 風

一月一日あいあらたまりおいと呼ぶ

お元日 日本人の目の黒さ

初日の出 女心女身を離れたり

誕生の馬の額の白い星

友だちの蜜蜂の針薔薇の棘

大阪市 不二田 一三夫

北斎のアイデア富士を赤く描き

ニクソン主演 308円のドラマ

性周辺などとNHKも負けてず

寄席

なあにまだヘルスセンターがある強気

人気者つづき仲店毛糸編む

八尾市 飯田 悦郎

地下足袋が家で酔うのも三カ日

ひがみ抜く目付きに心を見つけない

身の上の相談椅子に深く掛け

貧乏な小商人ほど値切られる

大阪市 飛田 好一

今日よりは若い日はなし派手に着る

別れ来し道へ未練の氷雨ふる

祿でない奴でも何かある取得

断酒して

哀歓の歴史と共に酒ありし

倉敷市 田垣 方大

車椅子ある夜走った夢をみた

聴診器もてば顔まで変る女医

ハネムーン新郎蜜柑むかされる

手を挙げて通れば善意満ち溢れ

松江市 舟木 与根一

押し売りが訥弁でついだまされる

美しい唇 はっとする啖阿

主婦として十円安い満足感

よく晴れた師走へ財布の紐ゆるみ

倉敷市 水粉 千翁

順々に祝詞も妬いて菊日和

どうしても勝たねばならぬとき狙う
釣銭はいらぬと小さい腹を見せ
朽ちるとき悟る落葉を焚いてやり

岡山県 大森 娛句 楽

ドル・ショック他所に歳費は超党派
物乞いが来て世の不況知る師走
走れ幸太郎のマーチに馬券握りしめ
積雪に埋もれた街に湯がたぎり

鳥取県 森 田 布 堂

やりくりを秘めて素直な子に育て
飲みきった薬にショックな記事を見る
オラ知つちよるなどと隣はもめている
還らざる遺骨叙勲に腹をたて

倉敷市 小 幡 里 風

あざやかな演出無理も聞いてやり
何かあるくるとトンビ向きをかせ
露路裏のある日活字となる美談
地球儀が揺らぐ何かが欠けている

和泉市 西 岡 洛 醉

兄さんと呼んで芽ばえた幼な恋
さからって見てもどうなるものでなし
泣けばもう事が済んだと思かさよ
独身の音で掃除機妻の留守

姫路市 村上 春 巳

幸せはぼくにも出来る社会鍋
咲き残る一輪抜かずにおいてやる
ポンコツでするドライブも空の青
下駄履いて下駄の楽しさ三カ日

下関市 志 賀 木 石

初詣欲な願いも小あきんど
明日知れぬ身が損したの儲けたの
不景気だなあと同業から電話
善人も悪人も乗る霊柩車

堺市 藤 井 一 二 三

親の欲天下取るよな名をさがし
美容法また食欲の秋に負け

大阪ニセ医師事件

儲け主義のカルテはニセが着る白衣

大萬川柳連続三年残念賞

作句力安定と云う伸び悩み

出雲市 尼 緑之助

たたかいのリズムハッタリのぞかせる
弱点の指適も受けて十二月
善人の努力はその日過すこと
突っぱしるニュースも公害と思う夜

名古屋市 吉 田 水 車

冬のミニ女は強き者なるか
後ろ姿もだんだんゴリラに似て来る

兄の叙勲に

祝叙勲おめでとうを二度申し
十二月けつまずいてもふり向かず

倉敷市 藤井春日

忘年会無芸大食芸のうち

足洗うすべなき悪の吹きだまり
よろめいた夜を潮騒責めるごと

天職と悟り古稀なお職に生き

伊丹市 小川静観堂

妻の遺影あの日よりも年をとり

ジェット機さえ飛ばねば青空うまい水

わが人生の欄外に朱書す憂国忌

ままごとのようなデートでいつもすみ

今治市 越智一水

白い杖だけはあせらぬ十二月

女体とはああすばらしき大地かな

うつむいているから女だとわかり

つるし柿冷たい風で味がつき

大阪市 中川滋雀

次女白血病にて逝く(三句)

骨壺に入って新居へまた帰り

編みさしたままの編機が目には痛い
悲しみに克とう師走の風が吹く
雲垂れた重荷へくよくよしておれず

桜井市 岩本雀踊子

茄子をやく妻も古き味となり

立札に神話が生きてみる出雲

妻の手をかりる暮しにけつまずき

明日のない命も日本男子なり

呉市 林野甦光

ボウリング綺麗に上げた手が見せ場

内職で貯めたと一晩外で食べ

善人を自負して女にはもてず

外国を見て死にたいとは不憫

大阪市 有信新之助

たこ焼の温みが足を急きたてる

一日中ニュースを聞かぬ靴を脱ぎ

五十を過ぎ平均寿命をメドにする

仲人をするので作るモーニング

愛媛県 渡辺曉童

お日さまの他はむかつくことばかり

反抗を忘れて冬の水が澄み

じわじわ首のしまる口約

長男に長男生れる

孫の名にうれしく困る漢字表

松江市 岡崎祥月

十二月最良の年無事終る

駭け引のない生活のうるおいよ

冬空も変らず太陽笑つてゐる

月四角今夜の月は泣いていた

倉吉市 奥谷弘朗

宿命と割切るまでにまだ足らず

馬鹿笑ひして溜息を消してやり

ポーナス日せめてでっかいテキを買ひ

二人きり鍋焼うどんを食う師走

兵庫県 大江秋月

五年間年の交らぬ定期券

年末も年始も妻の忙しい

金の無いのも仕方と悟る年

風だけが冷たい京の街を行く

東大阪市 宮西弥生

素通りが惜しい古都にふるもみじ

マネキンへ一足早い新春の服

ミンク着る女 野生の眼に光る

スモッグ晴れた青空へ手を休め

広島県 高橋鬼焼

がんばってみれば何んとかなる赤字

振りむかぬ後ろ姿へ涙ふく

冬雲へ切れ目がほしい待ちぼうけ

小走りの背を北風が押してくれ

神戸市 小浜牧人

ライバルの一と足先へ目途をおき

美辞麗句過ぎてスピーチ座が白らけ

闘志さき気なく名刺を交換す

せつかちへエスカレーターのマイペース

大阪市 福井野迷路

懷中と値札が競う年の暮れ

窓を出た罵声帰る所なし

堂々と独善居士の寒椿

上げ底のただ見せるだけとは淋し

松江市 小林孤呂二

貧しくも口にあう物冬の味

下町に育ち市松模様好き

聞き捨てにされて明治臍を嘔む

年老いて葬儀の列へ佗しけれ

大阪市 川口弘生

運慶の大日若し円成寺

飯場でも女が居れば筈の目

診療が済んで咳する医者風邪

十年後の姿を先輩の名簿にみ

大阪市 江城 修史

地に還る病葉失意の視野に舞う

回想譜氷雨の中を亡兄が行く

雑踏に人それぞれの歩巾持ち

背信へ合わす歩巾を持ち合わせ

鳥取県 清水 一保

人生の坂道期待を背に感じ

健康と云う財産に税がなし

戦争を捨てた日本デモで死に

取入れがすんで雀も軒を恋い

兵庫県 河原 みのる

煩惱と仏心闘う刻暫し

俺の骨からむか墓地にもみじ植ゆ

エンマさん今年も補欠で置いてくれ

高度九千もったいなしと富士を見る

松江市 吉岡 通児

プラモデル日曜つぶしまだ残り

それ以来疎遠となった言葉尻

末席の下戸にも割勘容赦せず

ドル・ショックプランプランのままだ残り

大阪市 今西 章雅

医の倫理保険医辞退後よく書かれ

気前よく譲られ返礼気を使い

一発勝負弱者が運をかけるとき
桐一葉政権思わすように落ち

兵庫県 遠山 可住

長靴をさし上げて行く水の嵩

世の中のしくみがわかった時四十

美しい女へ女近よらず

勤続20年表彰式に

二十年勤続新婚以来の妻を連れ

愛知県 大谷 月都

九州四国旅行

機上から阿蘇の火口の人だから

一昔前の女中の名を尋ね

旅なれば行き交う船に手を振って

案の状子供が猿に嚇かされ

諫早市 原田 明春

事務官というが雑用ばかりさせ

田舎漬エプロン掛けの祖母の味

やけくそをボウリング場へもって行き

としの暮れ広告までがせきたてる

尼崎市 高津 徹也

どん底を知らない人の愚痴と悟り

マスコミの最尖端とおだてられ

鋳型とも思う団地の固さかな

背広の休憩エモン掛けがあり

鳥取県 鈴木村 飄子

心臓麻痺という死にようをけなるがり

ドッコイショと鈍行発車する

若夫婦へ意地に稼いで疲れが出

アカギレがあしたは雪になるといふ

生駒市 草深 醉升

大き目の服買うてから細り出し

郷愁をそそる今宵の空の星

地に這うたまま身構える冬の蜂

向寒の折柄テレビの水着ショウ

小松市 馬場 魚山

四度目の葉が散り療養にない自信

上げ底と見せず上げ底の包装紙

入墨が来て浴槽の唄が止み

分解をされる宿命皿のかに

大阪市 室谷 徹舟

教養が邪魔か女になりきれず

健康を労わり合うて共稼ぎ

船酔いの旅の情が身にしみる

末っ娘の大学祭だ妻と行く

笠岡市 木山 要次

父と子に秋刀魚がけぶる水いらす

針山に針が光ってテレビ見ず

病床を励ます嘘と知りながら

音信不通友より封書できた賀状

(前巻) 出雲市 原 独仙

泥酔へ肩貸す方も千鳥足

道楽をした片鱗の渋いのど

湯加減を問えばナツメロ名調子

人生の起伏に友は伏しつづけ

西宮市 島居 百酒

秋冷えの炬燵へ蠅が手を合わせ

好物を供えて事故場の地藏尊

農耕で飼われ闘牛として稼ぎ

鼻の差へ馬券無惨に引裂かれ

大阪市 河井 庸佑

景色より魚がうまいと旅だより

言いたいこと言うても通る椅子につく

上司またさかなにされてる縄のれん

適当に喧嘩もします平和です

富田林市 木村 弥栄子

落葉焼く煙の中の自画自賛

胸に住む人ありきれいに女老け

愛される要素の一つバカなこと
おさまった鞘で眠りのさめぬ愛

島根県 小砂白汀

鳴りすぎて空缶だったことがばれ
おトイレを借りるだけへも自動ドア
散るときに散らせようとて風が吹き
崩れ去る音でシャッター降ろされる

笠岡市 松本忠三

寒風へミニスカートを活歩する
付合いに忙しいとは贅沢な
終りまで聞いて叱ればいいものを
きき耳をたて俎の手を休め

大阪市 西出一栄

ボートスへ工場の音の張り切れり
ふところ手師走に何をする人ぞ
除夜を聞く老の心が冷えてくる
狂った心臓お医者のかばん待ちかねる

大阪市 西川誓二

虹のまち延長開通

地下にまた客のフトコロ狙う街
二枚目の顔に直して出る楽屋
赤い灯の媚が尾をひく裏通る

諸行無常を我が頭髮に教えられ

岸和田市 葛城伊三郎

姑にも好かれる主婦で地味に生き
賭け事と知らずに軍鶏の必死なり
柿泥を地藏だまって見てござる
我れ老えど山泰然と素のまま

鳥取県 川崎あき女

泣きに來た寺で同じ人にあい
頑固さも私と共に年をとり
外遊のそれから遠い人になり
先着が真っ先につく寺の鐘

倉敷市 松下梁水

箸にぎる手も差し上げている賛否
長髪を切れば切ったでまた案じ
這入る穴ないから世辞に耐えている
演出の怒りは声に棘がない

松江市 柳楽鶴丸

錫婚乾盃まだまだ苦勞が続きそう
春や春花前線が北上す
名曲鑑賞雑念を消す正座
雲が踊る踊る踊るピクニック

東大阪市 竹中綾女

就職の通知へ一瞬うろたえる

規律ある生活のリズム取りもどす

腰弁のお菜へ骨の折れる日々

喪中忘れ年賀ハガキの列に居る

堺市 吉岡 青香

馬令六十二退社に思う

肩の荷をおろし見渡たす七曲り

夢に生き夢に終った指を折り

引き継ぎを済ませ今日から過去の人

感謝しているぞ解るか古机

堺市 伏見 茂美

嫁ぐ日の挨拶まねて母泣かせ

娘一灯園研修参加

奉仕の日々合掌から夜が明ける

天の橋立

雨足が強く橋立ベール着る

信楽焼の里

福狸選ればみんなに個性あり

島根県 大森 孝 華

親馬鹿をかげで笑って他人さん

一枝を鳥へあずけ冬木立

新調を母に見せたい遠廻り

風雪に耐えて日記と共に老い

大阪市 木村 水洞

世の中の義理の重さがわかる齡

十二月他人同士でたすけ合い

三人目の外孫

姓名学少しかじって名付親

姫路市 隠岐 不酔

芸なしと知ってて司会社社長責め

予報官社会人なら偽証罪

富士山は化粧せんでも日本一

竹原市 森井 菁居

かも知れぬから核心に触れずおく

どうしてどうして平凡の素晴らしさ

狂えないのがもどかしい男の孤

芦屋市 丸川 初甫

茶柱も吉日知ってるように立ち

盆栽の趣味雑草をつまみ出し

新館へ案内されるクーポン券

守口市 羽原 静歩

ひよっとこの面へ倅せこばれそう

梯子酒きれいに飲んで酔いつぶれ

しゃべるだけしゃべり盃伏せている

岸和田市 福浦勝晴

ホーム炬燵夫を愚弄する不貞

ロマンスを喰い物にする週刊誌

ピルの影マンモスと化し動かぬ夜

奈良市 宮口笛生

母

悪化する毎日と知る母が病み

なおるだけなおしてあげたい母が病み

老衰の診断医者をつめたすぎ

岡山県 池田古心

日掛け貯金するように運ぶ医者 of 門

時代無視前例だけを盾に取り

卑下癖が心の隅で癌となり

今治市 小笠原青女

十月七日類焼す(テレビぼてじゃこ物語の時間)

私には焼けない宝 子が二人

マンションに住む(一句)

石鎚山窓におさめた部屋に住み

真実を求め欺瞞の中に住み

笠岡市 出原真奇

床の間も便所も同じ菊を掛け

飲んで食い云いたい事を云うて去に

憎いはずの婿なのに可愛うて可愛うて

岡山県 出原敬一

初春の軸に寄添う木練り柿

上の子に牛見せに行く里帰り

嫁の背を流す息子を頼りにし

八代市 永松道雄

電化した部屋で喜ぶ父母の鑑

空嚙を飾り洋酒のコレクション

酔う程にはだか踊の名演技

倉敷市 竹内翁童

永久に生きるつもり of 金をため

妥協では無い激論をした握手

見栄を消しきれず左遷へグリーン券

鹿児島市 土岐トク子

はやる氣に和む端山の大文字

めぐり合う深き縁の大覚寺

脱社会可愛い娘をやれぬ人

和歌山市 野村太茂津

家内中師走の心に急きたてる

この依古地妻に似ている娘に見つけ

沈黙の池枯葉が舞って蘇える

鳥取県 谷無閑

年若の尼僧へ理由聞きたがり
倒産をしても外車を乗りまわし
八百長に表彰台の目がおびえ

大田市 藤田 軒太 楼

石橋を叩いて虎の子皆いかれ
君のほか居ないと虫のいい指名
棚一つ吊るに日曜ふいにする

堺市 高橋 千万子

永遠の愛をつげてるモーニング
根負けて受けた歳暮のおき所
ため息もつめた風船とぶ師走

大阪市 島 田 雄 峯

新婚へ割込む羽目の一人旅
途中下車博多人形で夫婦もめ
失礼と思う欠伸びのよく出る日

新宮市 大 矢 十 郎

お隣りが売れて我家の相場知り
老産医俺を墮ろせと言うた人
中年へ思い当らぬコマージュル

東大阪市 斎 藤 三 十 四

キスシーン明治の母も馴れた顔
目の前にヌードがせまるかぶりつき

忠臣蔵がチラホラ師走の街らしく

島根県 中 島 英 子

銀嶺の神秘をこわす搜索隊
倅せは先祖の植えた山があり
反省のため息孤独が倍になり

★

若 本 多 久 志

有田焼夫婦茶わんに旅の味
人生が変るでもなし古稀の春
充ち足りた余生とひとは言うけれど
今ははや食意地ばかりぼたん鍋
腹立てることもうとまし年の暮れ

北 川 春 巢

虹のまちオープン弥次馬になりに行き
十日頃やろとボーマナスばかりとき
目玉だけ買いに來ました顔してず
コップ酒コップの功德説いて飲み
雨戸閉めて開けたら一日過ぎている

西 尾 栗

水仙の部屋にこもりて路郎の句
六畳はわが城にして黄水仙
水仙や障子の外のしのび足

ビジネスで来た空港の孤独感
寄せ書が円陣となる良い仲間

菊沢小松園

川村好郎

手折られて散る花びらが手にのこり
目八分に捧げて女嫁きおくれ
灯を消して女の業のあからさま
思い出の汚れを落す掌を洗う

辿りついた椅子とは見えず反り返えり
急ぐまい足踏みすまい古稀の春
継ぎ木して春 私にも萌ゆるもの
何一つ持たず現世に生まれしに
車椅子先頭にしてデモつづく
どう見ても過剰包装という女

利用価値

高鷺亜鈍

利用価値なく父や夫がいるものか
父夫否男としての僕である
書き直し書き直すたびに人生短し

父男母女息子娘も人と人
社会復帰銭にならないものを書く
いのちがけにええ趣味おもちゃとどろ色紙
雑草に虫がついてもほうととかれる
めしいても四季を問わない花火の美
両親と関係はない息子と娘
恋愛結婚賛成せにがないから
ゲバ棒にわが贖罪よ如何にせん

老人の日記より

麻生霞乃

(一三夫・薬子宛の賀状から)

三猿で行けばうららかなる眺め
染めかえて花も気分を変えて見た
そおろそおろとまいるう地下も陸橋も

ゲバ棒の名で戦犯討たるべし
不逞な目明き按摩して儲け
留守番にむごたらしくも空マツチ
失恋をしたり得恋をしたりしてめしい
めくらでもじっとしている能たりん
小便をたらしたらして厨
若い妓に込みやられたと悔やしがる小皺
水漬を茶碗に入れた辛子漬
男みな助平やと尻を向け
目やに出て口臭いのでキッスやめ
夫諸共男嫌いの薄い髪
花電車アダムとイブが揉みおうて
前世の豚に還って尻に糞
婆さんと呼ぶのを背なで背なで聞き流し
昔とったキノヅカも更年期に勝てず
十中、八九男二三匹がよいところ

川傍柳 初篇研究

(百三)

前田喜代人 川端柳風
故
岡崎重義 高須啞三味
清博美丸 十府
藤井和雄 岡田甫

617 御ほうびの向ふに泣つつら式人里

車 弓

高須||駄勞解で恥ずかしいが、孝行者として倅か娘が表彰される。その向うに両親の嬉し泣きしている顔(泣きっ面)がある。という句で、別に特定の人物ではないと思うが。當時なにかそんな話題でもあったか。

前田||この解でよいと思うが「泣きつつら」という言葉からうける感じは「ほうび」を得ることが出来なかつた二人の泣き面であるのとれる。また単に「ほうび」そのものの向うに、それを受ける「泣きつつら二人」がいるのとれる。

岡崎||違うように思う。しかし「泣き面」がなぜ二人でなければならぬのか未考。

清||仏御前と祇王・祇女ではないかという調べてみたが確証が得られない。御ほうびをもらったのが仏御前で泣き面をした

のが祇王・祇女ではないかと、平家物語を開いてみたが、仏御前には別に清盛からほうびなど貰っていない。以上駄勞解。
藤井||泣きっ面はあくまで泣き面で嬉し泣きではない。表彰されている末席の方であるが、二人については何か史的事実の柳化であろう。「大岡裁き」の一シーンを想像する。

川端||在原行平が須磨の配所から許されて都へ帰るのを、松風・村雨の姉妹が泣いて別れを惜しんでいる句であろう。

又流されてお出よと二人泣き 一六・37
須磨の浦目出度い事に二人泣き 天智2
御解洛のあとしほたれて二人泣き

宮二・16甲

丸||「ごほうび」は源三位頼政が近衛天皇の御悩の原因である鶴(ぬえ)を射たごほうびとして賜わった菖蒲の前「泣きつつら」の二人は菖蒲の前と同じ年頃、容ぼうの似

た二人、これに菖蒲の前を加えた三人の前に頼政を召されて、三人の中から実の菖蒲の前を連れ行くよう仰せられた。天皇はかねがね頼政が菖蒲の前に心を寄せていることをご存知だったので、恐懼した頼政は「五月雨に池の真菰の水ましていづれあやめと引きぞ煩ふ」と詠んだ。天皇御感あつて、みづから菖蒲の手をとられて頼政に賜わったという。他の二人は泣きせそをかけたことであろう。

頼政に並べて見てわづらわせ 天五・1

岡田||丸先生の説は一解として頂くが、さて「泣きっ面」の表現がどうも落ちつかないで心にひっかかる。「大岡政談」あたりを再調するまで、小生は?としておきます

川端||主題句を富士野鞍馬先生に伺ったところ孝行者の「ごほうび」ということでした。どうも礎解のように思えてきました。岡田||小生も大たい同意見なのですが、「

泣きつ面二人」が判然としないので、もう少し考えてみたいと思います。どうも裁判関係の故事によっているように思う。とすると大岡政談などが第一のマトとなる。

618 座敷牢貳百八十両のどら

岸国

高須 十五と十三で二八、すなわち十五両と十三両で二八両というのを、一ケタあげて二百八十両といったのではあるまいか。既出の「空を二度見たが息子の落度なり」で、座敷牢となったのであろう。

十五両十三両と二度のどら
十五点十三点と息子とり

百一十

など十五と十三をならべた句もある。

岡崎 贊。二百八十両は一ケタあげたものであるが、二十八両は十五両と十三両で、十五夜と十三夜の月見の散財をふまえているもの。

藤井 贊。一ケタあげたのは百三十里も花嫁は行くおもひ 傍一三
江戸から鎌倉まで十三里を百三十里としたのと同じ考え。

川端 贊。

きつい事十五夜および十三夜 一九・二
二度めには月も親にもすぐ成り 二四・九

丸 贊。但し「百三十里」の誇張は、花嫁のその時の心理にぴったりのものであつた。「二百八十両」は単なる誇張だけであつた。

岡田 贊。それまで夢中になつて費やした金の莫大さをもふくめての誇張であるが、つまらぬ点では同感。

619 木のまたに位牌のふへる十三日

車弓

高須 十三日は師走の煤掃の十二月十三日で、御仏壇も掃除するのに、ちよつと位牌の置き場がない。なまじ変なところへ置くよりはと、庭の木の股へ、ひとまず上げておく、という句である。

十三日小鳥は梅へ吊るされる 傍四・二〇
などは尋常な方で

小谷堀舟で子の泣く十三日 四・一六
なんて突飛なものもある。

清 いろいろな家財道具が散らばっている中に、位牌だけが木の股にのせられている。忙しい煤掃だが、位牌だけは特別な場所に置く。

藤井 贊。大切な位牌だけが……が句のねらい。これが病人だと

中気をば隣へはこぶ十三日 傍一四六
というところ。

丸 贊。
山谷堀持仏をのせる十三日 安八礼八
というのもある。

岡田 贊。
620 散る迄は樽まだ明かぬ

高須 酒屋のタル拾いが来るたびに「タルはまだあかないよ」とことわっているの

燕子

は、そのタルに咲いた桜の枝がさしてあるからで、その桜が散るまでは、タルを借りておくつもりなのである。長屋の風流。

前田 此の樽は手のついた一升樽で、貧乏徳利の原始型だから、長屋住い、足軽部屋などで花生けなどに利用された。

十五夜の花立御用取りに来る 二九・一九
主題句の「まだ明かぬまだ明かぬ」は面白い。

藤井 前田氏の説明で礎稿一そう完全。

丸・岡田 贊。
621 浅疵を眉間へうける大さわき

高須 松の廊下の浅野候の刃傷で「浅疵」は吉良のつけた額の疵のことを「浅野」にかけてこういつたものだろうが、底の浅い下手な句である。

岡崎 一「うける大騒ぎ」の句調はおもしろい。

丸 贊。「浅」は礎稿のいうように「浅野」の利かせである。

浅からぬうらみ額へきずをつけ 一六・一十二
この方がやましか。

岡田 贊。

東京宿酔

東野大八

久しぶりに花のお江戸へかけて、六日ばかり滞在した。用件はヤボ用、茶わん屋の業界紙で新年号というのを割つけ校正するのである。普通の新聞紙の二十八ページ分だからかなり重労働であるが、工場が日刊新聞社なので、てきぱき作業が渉るのは至極気持ちよかった。大抵、朝九時半から夕方六時まで歳末の日はアツという間にくれる。午後五時すぎともなると、八百八町のネオンが「早くおいでよ」と五彩の光ばうを惜しみなく八方に放射してチカチカする。待ちな、待ちな、もう一息——とこちら灯ともしごろになると五体くまなくソワソワと躍動する。お目あては、いわずと知れた酒・酒・酒。

仕事も初手一山越して、今日はクリスマス・イヴ。悪友の一人から電話。渋谷のハチ公前で午後六時半に、彼女ならロマンチックだが、とって六十歳のおじいではな—やあ、きたな。おお、久しぶりじやうの。この悪友は十年ぶりなのだが、男同志は三千五百日とて気にしない、気にしない、話はそれだけ。久しぶりじやからゲテモノにしようと相談

一決新宿へ出て、うなぎのフワケ（脂分け）にコップ酒。フワケというのは、うなぎの頭から臓腑、尻尾など五体を形成する部分品をバラバラにして、クシにさし焼どり風に焼くことをいう。江戸期の解剖をフワケといったことのシヤレだ。友人は、大陸で私と机を並べのち映画監督に転向した。満語は特級で、満映スター、李香蘭、李明、鄭曉君などをアゴで使った男、今は土建屋の重役、その重役もハルピンのキタイスカヤ裏で、羊肉のフワケを食った話が抵抗なく飛び出してくるのもこの場の成行き。

「お前、ニーナのヘソというのを月刊満州に書いたろう？」

「ああ、ひどい目にあつたな、アレが検閲でひつかかって、ニーヤ十何人を雇ってバリバリそのページを破りとって、おかげ発行が二日遅れて社長は怒り出すやら、月給はさっびかれるやら……」

「そんなことはいいが、あのニーナはすごいブロンドの美人だったなあ、しかし道具がでかくて味はおちたが……」

「今というマンボ、和田アキ子級の女さ、ところでお前やけに面白いが……？」
「フフ、兄弟だよ、お前さんとは……」
「どっちが先だ、お前だとするとあのケジラミは……このヤロウ……」
どっちがどういったか、キタナイ話だけに以上のやりとりわからないところがミソ。

「彼女、あれでパレスチナだぜ」

「道理で鼻もでかかったな、鼻のぐるりに顔があった。ところで奴のヒモは洗濯屋のニコライで、奴はゲーローウの手先。戦前、ハルビン特務機関にダイナマイトをしかった」
話がここまで来たとき、轟然一発、家鳴り震動した。話の中途ではない、現実だ。二人の前のコップ酒が、そろって前方へぶつたおれた。とたんに、バカヤロウ……という怒声が鼻先にわき起って、当方またもや二人そろって止り木からとび上った。

「カアちゃん、何やってんだ……」

二階を見上げどなったのは鼻先で汗をたらしてフワケを焼いていたこの亭主だ。

「なんだって、このバカおやじ。わっちが一体何をしたっていうんだよう。」

と上からおばあが、首を逆さにしてどなりかえした。いや、ここじやねえ外だ。ダイナマイトだな、ありや。うなぎの煙がもうもう土間の客たちも総立ち。

ご存知、新宿はあの伊勢丹横の駐在所爆破事件の一パツこそ、まさにそのうなぎ屋のフワケの最中にこそとどろいたというわけだ。まさにニーナのヘソが火を吹いたのである。

その翌日の夜は新橋―相手は昨今売り出しの直木賞作家豊田穠。「長良川」で一パツ当てた五十代の新進作家だ。

「タイジン、おかげで最近売れて、売れて、ネタもどうやら在庫底だ」

と豊田。それでオレのことまで書きやがって―と思ったが、さわるぬ態で、いやあ川柳を書けよ、ネタはトラック三パイほどはあるよと私。私が川柳人と百も承知のスケの彼。

「川柳はいいね」落城の堀に浮いてる張形「ありや、川柳のケツサク中のケツサクだよ」

「さてその川柳をどう思う？」

「風刺、滑稽、軽味―俳句なんぞの比ではないね。今ごろの川柳はどうも文学づきすぎで、そんな風味は皆無。悲しいね。」

「平安」誌に載った渡会恵介がここにもいた。それを思うとついこちら天井を見上げた。肩書だが、プンヤの川柳観はいすこゝ交らず。「まあ、なんでもいから川柳ビアーを盛大にたのむよ」

かくて私は話題を別口へと転換した。張形は一つで沢山である。

おつきはベレー帽のオアニイさん―といったところだが、六十台のマンガ屋さん。そのかみの満州の同僚。今は田無市の市議員どので、さきごろマンガ集「想い出の満州」という本を出した。福島県生れだが、どうも江戸前のタンカが切りたくて、そのため新京で地ゴロ三人にバカにされ、袋だたきにあるところを、私が助っ人をかってで、とも

に手負いの向う傷をこさえた仲だ。

「大井正夫という人は、じつに行届いた人だなあ、こんどの大陸同窓会にはかならず行かざるめえ」

私の大陸における川柳との出会いは、撫順で彼の仲介によつてのことである。天弓、仙涙、岸柳、夢詩朗、蝶古のおレレキがいて青竜刀、木耳、正夫、呑潮、柳陽等のサムライ連中にそれはうけつがれていくことになつた。

ここはいいだろう。郷土の山菜の味をもつてるといふ。表障子は山形酒蔵。酒は上の松で、酒のサカナは漬物はかり。

「まさかあなたが花のお江戸で片ホトリながら市会議員のバッジをつけようとは……」カンにたえない顔でそうしみじみと述懐すれば、マンガのおじさんでこどもが当選させてくれたようなもんよ、とサラリといつてのけた風格がなんともいえない。昨今、ヤングパワーはこどもまでか……といえ、ちげえねえとニヤリ笑って、オーイおかわり。かくて鳥森は山形屋藤蔵の場でチョン。

最後は神田の好好。このママさんは北京広播電台の文芸部出身。美人で才女で、若い出入り記者の憧れのマトだったが、中国人のハンサム氏と結婚。今はそのご亭主の板場ぶりで殊のほか御繁昌。そのかみ、神田のヤミ市時代、青竜刀ダンナに連れられ、屋台店の隅でパイカル。彼女のご亭主と丸青のダンナが京劇「四郎探母」をうなり合ったもの。彼女、まだそのときは見られたが、今は毛の

抜けた兵隊ブラシそのまま。「花の生命の短くて」の感慨をどうするスベもない。

「この間、東野がくるって先生、一時間も待てりしなかったのよ。ダメじゃないか」とあうなり小言。どうやら兵隊ブラシの悪口がもれたらしい。

むかし北京で、拙宅に居候をきめこみ、ともに栄養不良でトリ目になり合った仲の、二人の画家と飲む。二人とも人民中国派。一人は毛沢東先生が人民政府を樹立したとき、天安門での一大デモストレーションを行ったあの歴史の祭典を演出した御仁である。三人で丸青ダンナへの惜しみなき賛辞をやり合っているのを、兵隊ばあさんが横できいててニヤリニヤリ。その光景の頭上に、藤原英比古の見事な北京の彩管が懐しく展っている。

このほか、天満千代、同時子の美しきおネエさん宅での超特級の一パイ。そうかと思うと「明治天皇と日露大戦争」という大バカ当りのキワモノ映画に、アラカンの明治天皇の勲章をこっそり高松宮から借り出し、そのお礼がたったの五千円だった、と今だにオカシムリの八十翁の気焰をきいたり、ぶぐさしと八宝菜と、コーヒ―と灘の生一本、それにかステラと山形山菜にうなぎのフワケを一つ腹に収めた、変な東京での五泊六日分をかくて、新鮮線名古屋行きにつけた私だが、いまこのあとの新年三日間に、どうも胃袋とアタマがまともでない私なのである。一三夫旦那、この宿酔的駄文をおゆるしあれ。

(四七・一・三)

川柳の美

戸田古方

詩は美を追求するものでなければなりません。川柳も俳句も美を追求する詩です。共に十七字詩でありますが、十七音字詩という方がよいのかもしれませんが。何にしても世界で最も短い詩であります。

川柳と俳句はもと兄弟、和歌という先祖の同じ血を引いています。和歌は三十一音字、五・七・五・七・七というリズムをもっています。上古以来日本人は和歌とともに生きて来ました。大抵一人で詠みますが、時としては上の句と下の句を別人が作ることもありまして。これがその後、連歌や俳諧というものになってくるのです。

徳川時代になって、それまでの連歌は俳諧と呼ばれるようになりました。俳句の原型が生れるのは松尾芭蕉の努力の結果であります。俳諧は多数の人によって興行され、時には百句を超えることもありまして。第一句は必ず自然の美を詠うことになっています。これが発句で、芭蕉はこの発句を名実ともに詩

の世界にまで高めたのでした。それを俳句と名づけたのは明治の正岡子規でありました。そこで俳句の求めるものは自然の美ということになるのです。

他方川柳ですが、俳諧への試みともいうべき前句付けというのが行われていました。前句付けに於ては、下の句七、七で題が出て、上の句五、七、五の作句をします。その反対の場合もありました。しかし、楽しみ半分、遊び半分の空気に毒せられて、低く見られることも珍しくなかったのです。そうだったのも、川柳は万人の親しめるものであり、何の束縛もなく、全く自由に、人であれ、自然であれ、あらゆる題材にいつでも書くことができただけでありました。

川柳は故路郎師によって、「人生批判、社会批判を通して人間を陶冶する詩」だと定義されました。しかし、川柳の美はそう簡単に理解されそうではありません。それでは一体川柳の美とは何でしょう。

我々は真、善、美のきわまりが聖であることを知っています。理性によって真を、意志によって善を、感情によって美を、更に、真は科学、善は倫理、美は芸術によって自らのものにするができることを知っています。

俳句は感情を通してたやすく美に至れるように思えます。だから、俳句はその意味で割合すんなりと芸術らしいものになります。しかし川柳の場合はどうでしょう。

批判とは自由に自分の考えを述べることから始まります。批判は感情の世界でなく、理性によるものと思えます。しかし、批判の底には善という目標を外してはならないものがあるものですから、もし、この世を善に満ちたものにしたいのなら、真はそのまま善でなければならず、同時に美でもなければならぬこととなります。真の川柳は聖者の詩でなければならず、川柳を通して、聖者を目指すこともできるのです。

しかし、前にいったように、現実には、時として、低く見られて来たのは何によってなのでしょう。よく考えてみなければなりません。それは川柳につきものの笑ひによってではないかと思えます。というのは、人はいつも矛盾の中に生き、批判はこの矛盾の中から笑いを掘出していくからなのです。しかし、笑いにはいろいろの種類の あることを知らねばなりません。高級なものとそうでないものと。

笑いを楽しむ喜劇もバラエティに富んでいます。すなわち、ユーモアとコメディとナンセンス。ユーモアは人生のより深い所にふれ、涙と笑いがあるのに、コメディの方はより低く、場当りの笑を誘い勝ちになります。路郎師のいわれた批判はいうまでもなく前者で、これこそ人々を文化へ、芸術へ人々を導きます。さらにいうなら、もう一つナンセンスという笑がありますが、これは狂句や駄洒落の世界で問題外です。

こういう美しい川柳は古川柳にも、現代川柳にも見られます。私はまず路郎師の業績の中から求めてみたいと思います。しかし、俳人の中にも川柳美を見出すことが出来ます。一茶は貧しさのために、自然を安閑と鑑賞していられず、いつも自分を遂い立てる人生への挑戦をせずにいられたからです。私は

近 詠

須坂市 高峰 柳児

金策に座られ嘘がまともらず
見合から沙汰なく母からあせり出し
断絶がきれいな隠居部屋あてがわれ
上向きの家運迷信振り向かず

名古屋市 鈴木 可香

傾いた家運をしらぬ琴の爪
寿命さいてもと祈る百度石

一茶こそ、川柳と俳句の接点の作家というより、川柳した俳人だといいたいのです。

今日の世界も悲しみはいっぱい。不如意。個人的だけでなく、社会的な不安、俳人の中にはそれに触れずに作句していられる。自然の美だけに酔いしれていられる人もいられるかもしれません。

最近、私はある機会から、これら俳人のいう日本の自然の美を根本的に調べてみよう、それによって、川柳をより美しいものにしてみたいと、俳句に近づいてみています。そして、俳人が美の追求に切迫している姿も見ました。それは全く他山の石でもありません。亡くなった白柳氏は、分析に分析を重ねている数少ない柳人であったと惜しまれてなりません。まだほんの駄出しながら、こうした息吹きの中にいて、現代俳句の中に多くの川

柳省して変らぬものにはね釣瓶
唾の子に桃割れじつとみつめられ

大洲市 米沢 曉明

神棚へあずけて置いたのを忘れ
福寿草仲よい夫婦らしく咲き
南国も初雪を見る十二月

今治市 月原 宵明

よんどころない訳で男は酒を飲み
攻められて桂馬の如く行かんかな
ぼつねんと結局夫婦二人だけ

柳らしいものをすで見つけました。一方、川柳にも、「感じの句」というか、俳句に近いものもあります。

川柳一筋に生きている私が、俳句との両刀使いでも器用にするつもりでないかといわれるかもしれません。しかし、私は、そうしようとも、そうならうとも思っていない。

私は不器用なのですが、それだけ一筋に、大それた考えかもしれませんが、この機会に、「十七音字詩は一つ」といえるかどうかたしかめてみたいのです。俳句の勉強によって、よりよい、より美しい川柳をみつけたのです。雲をつかむ夢物語とは思ってはいません。先輩白柳氏の急逝によって、それは一段決心に拍車をかけたようです。

機会を得れば具体的句例をあげて述べるつもりです。

枯野原火を放ちたしマッチ持つ

岐阜市 市川 鱗魚

晩学の辞書舌うちをくり返し
嫁の理の通った夜の座が白け
雪見酒だんだん窓を開けたがり

今治市 長野 文庫

セールスが折り目正しく断わられ
どんなこと祈るか母の長々と
何の因果の棺桶用の板となり
のどまでは出たがいわれないお正月

「旅人」以後の

麻生路郎作品

14

三十五年二月号

不朽洞句帖

小さな反抗が映画へ行つて留守
貧乏だけのおちつきだけは失わず
けむりけむりお前の行くところへわしもゆく
第二の天性か女はマツチ摺る
テープコードーママの声だけ甲ン走り

鬼百吟の弁

菊沢小松園

俗に瓢箪から駒と言う言葉がある。辞書に依れば、偶然から思わぬ結果が出ることをある。ある席上で題を出した「鬼」に居合せた

人達がそれは難題だ作句しにくいと言う。私も老来に及んで刺激の鈍化した心へ一鞭当てて見たい作句意欲の一助として自分自身を切磋したいと思い、仰々しく言うて奮起一番此処に鬼百吟となった次第、別に烏澁がましく人に見せて批判を仰ぐ程の代物では無論ないが一題百吟はかつて路郎先生存命中に私も何度か経験してるところ、作句の打開策として一題百吟の効果を先生からよく聞かされたものである。年寄りの冷や水と笑わずに、後

金持は兄なんですと学者で居
社長の父は自家用車をきらい
ベル鳴って犬が答えただけの家
時計が一つ鳴った役目を果たすよう
魚釣りに行きましたのと案じてず
共産党大地を蹴って戻って来
かみなり族飛んで灯に入る虫のごと
時計の如く古び下駄の如くちびたり
日車翁終焉の地を訪ねて
南無日車さよならともいわなんだ
何事もなかったように近江路は霽れる
杏林川柳会 「戎橋」
家出して来たのも渡る戎橋
南海電鉄川柳会「赤帽」
赤帽のこんな男と思うチビ

(馬 静 島 傍)

に続く頼もしい人達への捨て石の一つともなれば望外の幸であり、また本懐でもある。

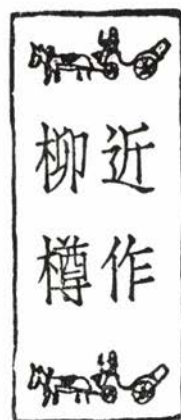
鬼百吟

一日一善鬼もやっぱりそのつもり
蓮の咲く音を夜警の鬼が聞き
こころある鬼は鬼門を避けて建て
血圧を気にする鬼で金が出来
むかしからホットパンツの鬼の国
三本の指を鬼の子不思議がり
デートする鬼は蓮池夜もすがら

鬼の目に涙我が子に先立たれ
遺言を書く鬼仏の顔になり
懺悔する鬼赤くなり青くなり
仏心の出て来た鬼から先に逝き
風鈴へ鬼立停まるゆとり持ち
走馬灯鬼の親子の柳がけ
鬼に逢いに行くのに女化粧する
酔った鬼金棒枕に寝てしまい
金出来た鬼は命がおしくなり
角かくし鬼の花嫁出来上り
仏様も人間も居て鬼楽し
仁義礼智信鬼は終いまで読まず
遺言を書くと優しい鬼になり
パトカーの鬼だけ拳銃許される
膝の上だけの我が子に鬼育て
鬼病んで仮面を譲る日に備え
逃げてゆく鬼は流線型になり
金づまり鬼金棒を押えられ
都々逸も唄えぬ鬼で食うばかり
金棒を杖に神経痛の鬼
風引いた鬼は虎の皮がかね
鬼もなお外輪の娘叱りつけ
鼻筋の通った鬼は横を向き
人間のホットパンツを鬼わらう
鬼老いて成仏願う手を合わせ
鬼界ヶ島大きな魚は寄り附かず
断末魔鬼は金棒離さない
赤鬼に添うた青鬼気をつかい
蓮の花ばかりで鬼のマスゲーム
別居した鬼の夫婦のすれ違い
金棒に縋り故郷へ向う鬼

鬼のスト今日は地獄に笑い声
針の山の鬼だけ靴を許される
蜘蛛の子を散らした後の鬼孤独
笑って漫画の鬼はこわがらず
口開けて笑わぬ鬼が恐ろしい
金出来た鬼の夫婦はよく笑い
血圧が気になる赤鬼診てもらい
赤鬼は恥かしがつても色に出ず
鬼も十八ハンドバッグをねだられる
鬼の年頃何やら匂うものをつけ
夫婦して角磨き合う睦しさ
一たんは鬼と思った人恋し
鬼ごっこしてた同士で持つ世帯
鬼蓮の目目を避けた色で咲き
鬼泣いてみんな出て来るかくれんぼ
齢すでに鬼も世間を気にしだし
鬼として子供の居ないところで泣き
小父さんの顔に似ている鬼の面
年頃の鬼は内輪で尋ねてき
税金を気にする鬼は頬がこけ
角かくす時は優しい声の鬼
下ツ端の鬼はど肩で風を切り
鬼の目に何春の花秋の月
雪月花鬼も聞いてた知っていた
針供養鬼の姿は今日見えず
針の山の歪んだ針をなおす鬼
血の池へ鬼の新米にり込み
夜更しを鬼は閻魔に叱られる
桃太郎は逃げて帰ったことに書き
大江山に居た頃鬼もなつかしみ
念仏の上手な鬼で喧嘩せず

敗戦の歴史は書かぬ鬼の国
衰運の鬼瓦さえ伏目勝ち
金棒を持てば喧嘩の絶えぬ鬼
患うて故郷恋しい鬼になり
鬼の女房内緒の八卦見てもらい
閻魔堂素顔の鬼は嫌がられ
心境の変化顔も仏に近い鬼
鬼の女房近頃ダイヤの光る指
平和に徹する鬼で何にも武器持たず
夏場だけ鬼もビールに変えて見る
金棒も細身鬼も年波には勝てず
酔うて帰って金棒何処かえ置き忘れ
角かくし堂々として鬼の花嫁
出来ている仲とは知らぬ鬼の親
ひっそりと鬼の棲家はもう宵寝
逢い曳きも血の池地獄の見える丘
限界を悟った鬼の手が震え
マイホームの望みへ役得きつい鬼
血の池で一風呂浴びる蒸し暑さ
手拭で角をかくして盆おどり
子沢山な鬼でアパート断られ
鬼の囁やきそこの埃舞い上がり
方角が悪いと医者を変える鬼
鬼の目に血の池地獄も秋の色
盆休み錆が出て来る針の山
鬼界ヶ島暴れた奴の行くところ
腕取られてからは静かな網館
一寸法師にやられたことを鬼言わず
雲流る秋には鬼も物おもい
賽の河原子の無い鬼が廻される
禿げて来た鬼で人間怖がらず



川村好郎選

岡山県 嘉数千代香

東大阪市 坂東靖子

ミレ一の絵愛して過疎の土に生き
負け惜しみそんな自慢を聞いてあげ
主義主張持たず無色を楯として
しわがれた乳房へ母と云う重味
入知恵へ指人形が動かない

大阪市 阪上十止庵

島根県 堀江芳子

男一匹木枯しに背をまるめ
妻があきらめて平和な夜にもどり
人並に妬けぬ切なさ齢が上
晴着脱ぐまでは気にする凶のくじ
結局は同調をする妻なりし

大阪市 柳原静香

島根県 榎原秀子

空虚なる心を埋める孫が増え
おしっこが云えずおませな口をきき
娘の家の温くさが老いを引きとめる
腹立てるまいぞ私が育てた娘
疑うて信じて夫婦の歴史なる

癒えてなお主の愛子の愛友の愛
しあわせは子を送り出す朝の多忙
目覚しで起きて働いたのしさよ
ホームゴタツ貧しい心も暖まる
終身刑のように冬の蚊のうつろ
心みなぶつけるペンよ離すまい
寝て暮らす日でも倅せ居てくれる
生きているだけでいいのよ独りごと
マンネリが恐れ安静時間です
寝て指図ウーマンリブと言われても

高山の花はおごらぬ色で咲き
わが年に気付く枯葉の舞い散る日
いうことをズバリいってて水入らず
しあわせを戻す白菜切る音に
一泊の旅行へ妻のリハーサル

羽曳野市 麻 野 幽 立

忘れたきこと多かりき年暮る
ねずみ穴塞ぐ子歳と知りながら
ロマンスの過去美しく秘めて老い
抵抗があるから無視するダイヤの手
十二月代理ですます義理が増え

米子市 増 田 竹 馬

イメージチエンジとやらで歌手の眼がくぼみ
凡鐘の文字拾い読む紅葉寺
孫も殖え末娘も嫁ぐおらが春
四億円費って三億捕まらず
いもづるは御馳走だった古日記

大阪市 黒 田 真 砂

心の病い癒やす術なくワイン飲む
紫のふとんへ母の高低し
白々しい嘘と知りつつ聞くも愛
倅せと思えば木枯さえ温し

嵯峨野

横笛の悲恋を語る声の艶

大阪市 小 谷 葉 子

北風に微笑む顔を別に持ち
決算もすんで紫煙まろし
新刊サラサラ春の音となり
夕陽に心あずけて坂のぼる
三度まで堪える私になっていた

竹原市 三 宅 不 朽

もう父を画いては呉れぬ子の育ち
いささかの敵意明日への夢を増す
足るを知ることか不惑とはわびし
去年の荷の結びをしかとたしかめる

竹原市 脇 本 政 己

なにほどのものがのこるか掌のくぼみ
きず口がぱっくりひらく人に逢い
下積みのドラマは誰も見てくれず
ほそぼそと老を養う沙魚を釣り

東京都 宮 崎 美 津 子

起きてほし寝てほし入試迫る夜
受験生みな秀才に見える親
酔客に和むこともありラッシュ
口論の悔い若い証拠とも思い

竹原市 生 信 笑 子

散る事も知らずガラスの中の花
ぬかるみを抜けだすすべもない師走
待つ事に慣れて人間不信感
いたわりの言葉がほしい反抗期

愛媛県 小 山 悠 泉

元日の贅沢朝の湯が溢れ
うたがわぬ妻へ済まない花名刺
アンコール出来ぬ五十路をはがゆがり
心配をすなと心配さす息子

鳥取市 両川 洋々

正論を貫き冷たい奴にされ

話さねば怒り話せば氣を揉ませ

酒ついに尋ねもしないことに触れ

葬式がある日お寺も活気づき

羽咋市 三宅 ろ亭

能登の良さ魚に景色におらが家

年の瀬の仏具磨きはあとにする

若返る積りか街へマフラ換え

流動へ五十の年輪追っつけず

愛媛県 宮尾 みのり

我が道のレール自分で敷いていた

ざわめきの孤独へターミナル暮れる

つつましく生きてポーナスというぬくみ

久方の散財子のもの夫のもの

岩国市 村井 西合

ひと言を女ごころがききたがり

どっちみちすがってならぬ膝と知り

くどこうかそのふところに飛びこんで

ここだけの話どこかで聞いたよう

岡山県 武元 柳子

女には女の話冬支度

ぶらんこの仲裁をする秋日和

野仏に道をたずねて過疎の村

紫の夜具が欲しいと子に便り

大和郡山市 森田 カズエ

何割かの打算もあつた恋みのる

遅刻した夢をみていた寒い朝

体温表のグラフ乱れた面会日

超勤をしてタクシーで娘の帰宅

岡山県 谷川 渥子

折鶴も天翔けると初春の朝

渴く日の痛い吹雪が背へ抜ける

今日を積むなんと積木の重いこと

手鏡へ終局のないドラマ追う

鳥根県 鳥屋 とみ子

収穫れの鎌は嬉しい音で鳴り

青空は皆わがものに野良仕事

柿落葉掃く手迷わす色の波

減食の夫へ合わす箸をおき

鳥取市 藤本 佳女

孫の声耳をくすぐるいい電話

たまに出る旅だ口紅つけて行こ

カマキリの雄が喰われて恋終り

松葉ガニ催促するよな子のたより

和歌山市 ふきあげ 虎城

池の鯉はねる私に嫉妬して

梅のない定年萩の花こぼれ

印相に無縁出勤簿のない会社

ガラ空きの喫茶デートに気兼ねする

金剛山

富田林市 凡吉改め板尾岳人

雪を待つ心を磨ぐ登山靴

雪を踏む冷たき汗で吹き飛ばし

もう少し待ってゆとりをとり戻し

鳥取市 佐々木静泉

たね全部見えて楽しい子の手品
手を伝う温みに疑ったことを恥じ

山菜を喰いに来たような寺参り

今治市 薦本昌道

移り行く世代読経へ唱和せず

底辺を曝して賭ける小企業

平凡なる真理勤儉貯蓄型

大阪市 白石潔

身辺の整理などする気の弱り

点滴が聞えるような夜の静寂

寝そびれて病床に聞く秋の音

七尾市 松高秀峰

肩書がとれて本当に肩も落ち

辻褄を合わせ電話に出る夫婦

母子家庭母の背をもむ子に育ち

松原市 守屋万竿

元旦を孫がカラーにして呉れる

元朝は日の丸空の青に映え
空しさの果てなしデモの列に居り

羽曳野市 大峠可動

母の灯よお寝すみ冬の風が来る
人そしる人のころの震かな

陽も風も婦唱夫随の杖となす

鳥取市 近藤秋星

故里を我も遠くで想う身の

給料は飛んでも帰省楽しかり

戸外雪故郷も同じ雪ならん

和歌山市 吉野富子

白柳師を偲ぶ

師の後を追いたし此の世の旅なれば

しめ太鼓無駄口ほどに叩かれず

交差点出合った友と引返えす

今治市 伊藤一郎

若いのをこさえないと見くびられ

強制はされぬが割当てられている

賞与額テレビで知った膳が出る

今治市 渡辺南奉

宮仕え欠勤のないのが取柄

子と妻に街引きづられ十二月

七人の敵を忘れて妻の酌

山口県 栗井さちえ

間に合っているけど老婦の魚も買い

愚問だネそう言ってそう子の微笑
血の気だけ若い妻また逆ろうて

大阪市 岡 本 まさひろ

人減らしする機械を人つくり

忘却という特権つきで人は生き

大阪はへんなどこ地下に虹が出る

呉市 榎 田 英 詩

ママごとのママは人形を叱りつけ

お言葉に甘え招待高くつき

フラッシュが燃えず乾盃やり直し

島根県 錦 織 文 子

苛らだちを日記乱れた字で結び

秋を病む障子へ夕日落ちて来る

姑と言う嬉しい空想暖ためる

大阪市 西 本 保 夫

雑音の中に黙々平社員

制服もまたくたびれた平社員

その次の定年はボク平社員

鳥取市 両 川 康 博

傷心を癒やす助言にまで抜き

特売の噂へ主婦として走り

耳遠くなって善意も疑われ

河内長野市 森 本 黒 天 子

名人会年齢を聞かれて賞められる

連れ添うた顔かと病床見なおさせ

金婚式間近に下の世話さされ

米子市 石 垣 花 子

気弱さを叱る看護の行きとどき

思い切り方言しゃべる久し振り

車から花嫁頭が先に降り

新宮市 熊 野 溪 水

まだ吸えるタバコもみ消す日の妬心

受け付けの笑顔が消えて社のピンチ

贅沢な煙をたててサンマ焼く

島根県 東 原 福 子

小夜更けて落葉降る音時雨とも

君恋えば落葉に時雨走る音

商魂のネオンきらめく十二月

島根県 谷 岡 芳 枝

夫病んで夜毎に寒い夢を見る

夫にはとぼけて見せぬ診断書

白雲よ池に遊んで何誘う

島根県 梶 み どり

さりげなくいけて野菊の名をとどめ

ささやかなボーナス商人追い廻し

輪の外でバックボーンを持ちつづけ

大阪市 堀 口 欣 一

工場の窓から故郷のお母さん

日曜日根性のないパパの顔

泣き面に蜂偽手形掴まされ

新宮市 大 矢 富 子

どの文字を入れてこの愛綴ろうか

寂しさに気付いてほしい爪を噛む
拗ねたのでない空間がほしかった

尼崎市 中 谷 利 美

うぬづれが無くては出来ぬプロポーズ

頭金のつもり指輪をプレゼント

早よ飲んで寝るとばかりな妻の酌

東大阪市 落 合 思 月

善人の涙もろさへつけ込まれ

倒産の工場に換気扇まわり

パスガイド神話の国へ誘い込み

樫原市 岩 井 本 蔭 棒

フィクションへ涙を流すのも善性

おかしさを泳え合槌打っておく

君だから云うがこの鍵こう開ける

新宮市 川 上 久 司

遅刻したのに拍手で迎えられ

旅の恥捨てるところか持ち帰り

腕時計はずして自由な時を持つ

東大阪市 藤 田 飛 鳥

思い切り思慕を募らせ逢いにゆく

秋田犬出産

犬の子に地玉子チーズ届けられ

竹原市 楠 貞 子

詩も歌もなし腹立ちて掃く落葉

故郷をしのぶ気持に母がいる
神様にすがればすがる程身近か

鳥取県 福 田 陽 山

交通稿

子が生れ悦ぶ中に父が事故

七五三木履の運びも重たげに

二次三次ハシゴが続く八つ当り

姫路市 大 原 葉 香

我が事となればとまどう娘の縁談

今日も又砂漠果てしなく歩み

妻の眼をのがれた旅の気易さよ

八尾市 古 川 鶴 声

一枚の紙に漉き工の労働ぶ

我が人生枯れかかるのを身に覚え

長生きの野望に燃えて日々を病み

松江市 内 藤 喜 夫

平凡の幸かみしめて屠蘇を酌む

二の舞は踏まぬ女のもつ自衛

新春に酔うてもおれぬドル・ショック

宿毛市 山 本 窓 花

発車時間にらみうどんの熱いこと

打ち掛けの絹ずれ倅つつむ音

晴れ着より働くふだん着板に付き

氷見市 関 美 子

中年の長さに耐えるコップ酒

栄光の過去が重荷な土工妻
蟻地獄母とひ弱な子の月日

仙台市 川

村 映 輝

何もかも法で割り切る冷たい手
理髪料高い分だけ髪のはし

二次会に誘っているのが公務員

鳥取市 藤

本 鎮 也

持ち馴れて見ればにせもの手放せず
負けぬ気の母をおだてて予約させ

松葉ガニかごの余りへ笹を入れ

鳥取市 藤

本 惠 子

予約しておいて不安がまだつのに
にせもので結構私によく似合い

亡き父の遺稿が私に話しかけ

今治市 真

山 国 彦

ピーポーが町中ぞっとさせる夜
商戦にサンタを借りる同じ知恵

サボテンの我慢ビニール着せられる

今治市 原

田 輝 親

公約へ自然保護から待ったが来
木枯らしが父の忌日を告げに来る

極楽の諸相揃うて喜べず

和歌山市 垂

井 千 寿 子

主婦業にせめてボーナスほしい暮れ
迂余曲折今更妻の座で肥える

ネクタイを派手に男の抵抗か

岡山県 山

田 止 水

ライブも矢っ張り来ていた初詣
迷信へ今日は逆らうまい元旦

尼崎市 小

林 文 月

あと何度正月できるやろと生き
わが妻よ五目ならべなら負けてやろ

守口市 岸

本 豊 平 次

飼犬の牙の一理が突きささり
再会に月日は無駄に過ぎていず

河内長野市 井

上 喜 醉

親切で頭が切れても好かぬ虫
裸の触れあいので友情たしかめる

竹原市 簗

田 浄 美

ラストダンスあなたと踊りたい夜よ
昇給へ張り切る父が頼もしく

大阪府 塩

満 敏

国会も裏から見たら積木なり
若い母ベビーカーで押しまくり

鳥取市 山

形 春 海

やりくりがついて見上げる雲の峰
美しい嘘で稼いでいる師走

新潟県 高

野 不 二

寄付帳にあっさり書いてまだ出さず
貰わはない方へ腹立つビラくばり

虹の街

くり返えず穴居時代か虹の街
地下街は人地上我がもの顔のカー

大阪市 藤田 頂留子
出雲市 板垣 草丘

四十二のふたつ子頑張らなくちゃ僕
銃も剣も錆よと除夜の鐘が鳴る

青森県 波

花道がいくつもあって決めかねる

ただお

ボーナスの袋も母を恋しがり

鳥取県 林

停退が近くポイントはずされる

露杖

停退に半年残す短日よ

大洲市 堀

内 曉 風

役得のつもり汚職となる不運
安酒に酔う気安さの独りもの

守口市 野

呂 杜 月

心とは裏腹詫びてすましとき
簡単に感極まって抱くドラマ

豊橋市 鎮

波 翠 月

金借りるために頭をさげただけ
目ざましも寿命がきたか脈打たず

松山市 谷

のぶお

あるようでない倅せを抱きあきず
しあわせということにされよく眠り

兵庫県 高橋 近江
獅子脱いで今年を祝う顔馴染み
親戚の噂背に聞く朝のバス
今治市 今井 松花

食い逃げのデートへはたがやきもきし
架橋ボーリング骨まで届く瀬戸の島
今治市 古野 伶人

ぼけさせぬ為にと親をこき使い
一生へコンマ打つ気で職を替え
今治市 太本 バット

ビニールは重宝がられ邪魔がられ
薬湯と水湯腰痛まごつかせ
松原市 玉置 重人

人間の弱さ聞耳立てている
肚を見たつもりが肚を見すかされ
大阪市 平井 露芳

急ぐには非ず寒いから走り
警察が近所で用心悪くなり
備前市 武内 雅堂

衿足がほのかに匂う松の内
出迎えを馬鹿と叱った千鳥足
島根県 安達 潮音

願解きの孫すこやかに一畑寺
老いたりなバスの車掌にいたわれ
堺市 栗本 藤持

卵呑み梁から落ちる蛇の知恵
銀行に預金なくとも年を越し

弘前市

小山内 貞 男

筋道を立てて世間を狭く住み
あけくれに五欲心を吹き抜ける

鳥取市

有田 鹿の子

眼を病んで

狭い視野保ってあしたの夢を見る
感傷の涙は一人そつと拭く

大阪市

新川 貞 祐

燃えずとも逢いたきものを水仙の
彫深く皺む妻口数の減る

鳥取市

藤本 和 宏

内容にふれて小声になる電話
電話ちぐはぐそばに誰やら居るらしい

高槻市

山田 スミ子

知らぬ間に聞き上手になっていた
父ちゃんの味方になって子と話し

大阪市

小谷 清 涼

助け合いに添う硬貨のはじく音
借金も貯蓄もなくて年が明け

大阪市

村島 秀 村

わが友は呼べと答えず霊柩車
大売出し損してもうかる年の暮れ

大阪市

松岡 進

出しゃばりが何かと役を持ちたがり

大安に借着かあわぬモーニング

大阪市

今井 隼 人

女上位赤衛軍に女性あり
敬老の旗身に沁む年になり

大阪市

花田 繁 子

くりかえす師走を飽かずいそいそと
もう十年若くなりいたい好きな柄

和歌山市

樫村 ふみよ

筆不精のくせにポストはよくのぞき
島めぐり二泊せよとて風が吹き

泉佐野市

大工 静 子

髪染めて鏡の中の我れに照れ
過疎の歴史廃屋無気味に物語る

寝屋川市

福富 隆 子

ここにまだ蛙が居るなり貴君が居る
愛媛県 渡

高知市

竹崎 寛

貯金箱振つてはみたが足りぬ音
晴姿見てもらいたさに千歳飴

大東市

岡部 シゲ

長生きのおかげで医科費免除され
人生はゆっくり急ごう明日もあり

大阪市

広畑 賛 平

不運負けず打ち勝つ子に育ち

大阪市

内藤 ますゑ

▼中島生々庵主幹選「芸術文化」10・11・12
月から(〒545大阪府阿倍野区丸山通二丁
目四一九、総合芸術協会)送料共一五〇円)

大学出とだけ大学の名は云わず 北川春巢
盗泉の水をがぶがぶ飲む時世 吉田圭井堂
ひよっとするとひよっとした患者の死

福井野迷路

中島小石

いつわらぬ鏡へ疲れた顔

心迷えるものに川のすなおなり 小谷葉子

不二田一三夫

船場からまた名門が一つ消え

大坂形水



川岡霊眼子逝く

妻 川岡美須栄

長年同人として色々御厚情にあずかり又ご
指導とご鞭撻を頂いて居りました川岡霊眼子
(光雄)は、昨年十一月十三日正午〇時二〇

分狭心病にて急逝いたしました。一昨年五月
一日高血圧で倒れ四カ月程は安静に致してい
りましたが、時すでに今日あるを覚悟してい
たものと思われれます。

遺品の中から乱れ書を見つけたもので聞
病生活が何如なるものであったか、左記の句
からご想像くださいませ。

早五カ月流石まばらの見舞客
十月が来たのを布団に教えられ
脳卒中知名士病じよとからかわれ

顔出しただけでキヤリアはギヤラにする

藤岡花梢

救いようない沈黙に雨の音

岩田美代

怪我をした指ばつかりを可愛いがり

高杉鬼遊

長男へ男の影が消えている

河内天笑

笑ってるのは高座の二人だけ

不二田一三夫

ひとり旅細道ながら夢があり

久米奈良子

歯車は個性の表現許さない

天正千梢

京の庭みな善人にして婦し

宮西弥生

制服を着て気味悪い大学生

谷垣史好

サーピスに白紙で渡す領収証

有信新之助

手のひらの中にあるような素振り見せ

不二田一三夫

病床へ都市三十年の招待状

貸した本一冊戻らず歯抜けのよう

止められた医者の言葉の趣味のペン

全身の重み支えた足袋の裏

放屁放尿自分でやれる嬉しさよ

快方にむかう自信に怒がつき

死ぬものと悟れば何も彼も楽さ

最後の句の通り気分が悪いと申しまして十

五分後、「静かにさしてくれ」と申したま

安らかに他界いたしました。

柳人の妻でありながら余りにも愚かであ

った私、せめても柳界展望の一部に御記載く

川柳五十三次 (十七)

富士野鞍馬

32 白須賀

荒井から一里二十六丁（六・八キロ）で白須賀の宿となる。「膝栗毛」に、

「このうちはやくも、しらすかの駅にいたる。はいりくちのちや屋女、おもてに出、よびたつるを見て、弥次郎兵衛へ

出女の顔のくるきも名にめでて

七なんかくす白すかの宿

此宿をうちすぎ、程なく汐見坂にさしかかるに、是なん北は山つづきにして、南に蒼海漫々と見へ、絶景まことにいふばかりなし

風景に愛敬ありてしをらしや

女が目もとの汐見坂には」

と書かれてある。

京都から江戸へ下る場合、初めて海を見おろす場所が、この汐見坂である。広重もこの絶景を描いている。

33 二川

白須賀から一里（三・九キロ）で二川である。宿に入る前に境川という川がある。この川が遠江と三河の境界で

「遠州へつぎ合せたる橋なれば

にかはの国といふべかりける

程なくふた川の駅に着く。此ところ家毎

に強めしをあきなふ見ゆれば

名物はいはねどしるきこはめしや

これ重箱のふた川の宿」

と一九の「膝栗毛」に狂歌になっている。

境川の手前を「猿が馬場」といい、そこで

名物柏餅を売っていた。広重の絵はどれもこの柏餅屋の風景を描いている。

二川も今は豊橋市に属している。

34 吉田

吉田は今の豊橋市で、二川から一里半（五・九キロ）である。松平伊豆守七万石の城下

町で、豊川の吉田橋の右手に城が見える。一九の狂歌に、

旅人をまねくすすきのほくちかと

ここともよし田の宿のよねたち

と詠まれているが、この名物にホクチ（火口）があった。そしてこの狂歌は、

「吉田通れば二階から招く、しかもかのこの振袖で」

という俗謡を利かせて作られたものである。

川柳もまたこれによつて、

吉田宿みなあをむいて通るなり

小柳（八〇三）

初登り吉田の二階ふりかへり（武十五三）

二階から招く吉田の柳かな（武十四三）

などと詠んでいる。

広重の絵には豊川橋と吉田城が描かれている。

35 御油

35 御油

御油は、吉田から二里二十七町（一〇・八キロ）「膝栗毛」に、

「ほどなく御油のしゆくにいらたるところ

は、はや夜にいらて、両がはより出くると

め女、いづれもめんをかぶりたるごとく、

ぬりたてたるが、そでをひいてうるさければ、

弥次郎兵衛やうやうと、ふりきり行すぐるとて、

その顔でとめだてなさば宿の名の

御油るされいと逃げて行ばや」

と、ここの留守のすさまじさが書かれてある。

広重もこの状態を描いている。

名物のうちだと御油ですすめてる

(拾三)

兄弟もいんぎんに成る御油泊

(武十二三)

赤坂と御油の落馬も女郎花

(武十四四)

赤坂と御油の間で頭痛がし

(拾二一)

赤坂の恋は御油へも廻る也

(武十一一)

御油赤坂は客人が太夫さんニツメ(二六三〇)

と川柳にもあるように、ここの売女は名物と

梅

西尾 葉

知人の招待で、鈴鹿市の魚半樓の盆梅を見に行った。玄関から廊下。百畳敷の舞台と床の間、両側の縁側に、百数十鉢の梅に、それぞれ、雲竜梅、竜紅、蒼の竜、銀雨等と名づけられ樹令一五〇年から二五〇年のものばかりで、風雅な幹に満開、七分咲き、三分咲きがあり、静かな香氣をばなっていた。

昭和三十八年三月に秩父宮妃が見物にいらしている。写生している人、写真を撮っている人の中で主人公と話したが、この梅ある為に私は一泊旅行もまだよいという。花の時間がすんでからまた大変で、半日汲み置きの井戸水を、梅一鉢一鉢の性に合わせてやる。夏は夏、冬は冬で所謂、しごきをやらねばならない。温室育ち、過保護になつては、花の数も少ないし、香りもない。花にもやはり苦

もいわれていた。また

朝見れば御油赤坂の家ばかり

(武二六)

とめ女十六町のそなをさせ

(拾二二)

という句もあり、御油と赤坂の間はずか六町(一・八キロ)であった。「膝栗毛」に

「弥次「モシ赤坂まではもふ少しだの

婆々「アイたんだ十六丁おさるが、おまへひとりなら、此宿にとまらしやり

勞さして、初めて皆さんに見てもらえるものができるといふ。作句、事業、あらゆるものに通ずる話をしめしめときいて、心ゆくまで紅梅、白梅の淨い姿に見入っていた。

盆梅の銀雨の前の去りがたな

葉

八木摩天郎著「堺つれづれ草」 発刊記念懇親会盛大に催さる

吉岡 青 香

つれづれに書いたと見え筆のあと 小松園
文人の出る塚なり又一入 葉

すでにご存知の通り「八木摩天郎著堺つれづれ草」の発行が十一月十八日の朝日・毎日・読売等に報道されてから一カ月を出ずして五〇〇部余の申込みがあるという成功をおさめております。

この発行を記念して十二月八日すし半において生々庵氏の指導している千代の会の、文連会長高木幸太郎氏、商工会議所会頭吉田久

ませ。此さきの松原へは、わるい狐が出おつて、旅人衆がよくばかされ出すわ」

とある。「名所記」には、「売女あり。甘酒多き所」と記されて、天保年間(一八三〇—四四)には、戸数三一六のうち、本陣四、旅籠六二軒あった。宿駅としての賑やかさが察せられる。

博氏、堀富商工社長堀畑軒一氏堺の名士十七名が相集い心の通う祝賀の懇親会が催されました。

続いて十三日堺アトラスにおいて堺・若芽川柳会主催の発刊記念祝賀懇親会が行なわれ地元堺は申すに及ばず富田林・大阪市内等から集まる有志、生々庵主幹・番傘の左久良氏・小松園氏・葉氏等三十名の川柳人だけの温かき集いに生々庵主幹一同を代表して心情あふれる祝詞があり続いて小松園氏の発声で富柳会より寄贈の一合栞で乾杯の後摩天郎氏・令夫人共々喜びを全身にみせ謝辞があり懇親宴に入り各人々々ときのかくし芸が披露され、しばし時のたつのも忘れ、最後に葉氏の発声で万才三唱、摩天郎さんの愈々お健やかでご健闘されんことを祈り目出たく終りました。

摩天郎してやったりと鹿の子さん 左久良
堺市の中に八木家の軒古く 塊人
いま堺に男ありけり摩天郎 小松園

同人吟

秀句鑑賞

—前月号から—

正本水客

太陽の平等スモッグを破れず

藤井明朗

太陽は貧富疎密を意識し區別する筈はないが、人間が自ら造り出した害毒によって自ら太陽の慈みを拒否しているのである。

海鳴りを遠きいくさの音に聞く

小浜牧人

戦後二十幾年、戦争の実態を知らない若者が増えつつあるとき、ベトナムをパキスタンを遠きいくさの音と聞いてはなるまい。海鳴りに托した詩情が心に響く。

ひねもすの氷雨ひねもす火を抱かせ

工藤甲吉

淡々とした叙法が、よくみちのくの冬を伝えてくれる。

睨閉ず耐える苦痛が洩れぬよう

堀江正朗

体の不自由をおさえて生きてゆく苦痛をジツとひめている、睨閉ずの語がドキリと胸を打つ。

雨しとど薇薔の虚勢が哀れとも

河野君子

バラの虚勢と雨しとど、ピタリ動かない美事な表現であるが、哀れと言いきらない言葉を見付けて欲しい気がする。

聴診器移動別条ない手つき

原独仙

聴診器移動に患者の安堵感が素直に出ていい。

群って右顧左眄せずキリン草

戸田古方

アキノセイタカキリン草の驚くべき逞しさを右顧左べんせずと観じた句主はさすが詩人である。

酒に飽き饞舌に飽き海広し

河村日満

飲を尽くしたグループ旅行のあとの淡い哀感を海広しと大きく展開させて美事。

沢山の人が歩けば道になり

天正千梢

誰でも考えることを、何気なく表現して、それで何かを教えられる句である。

後藤梅志著

「秀句鑑賞」

送料共 六〇〇円

さりげなく見つめて未婚いぶかられ

久米奈良子

あんなに美しく、まだ若いのに……。ちよっぴりお節介な世間ではある。

宝石の売り子遠くの方に立ち

増田次章

美しくて静かで冷たい雰囲気、遠くのに凝集されている。

今宵又此処で昨夜も鳴いた虫

清水一保

きのうと同じ場所で今夜も虫が鳴いている同じ虫が来て鳴いてるんだろうか。そんなことを考えた経験が何度もあったように思う。今宵又此処での上八は何となくごちない、せめて又はまたと仮名書にして欲しい。

食欲が出てきた涙忘れまじ

川村好郎

私も二十年前に肋膜炎で3カ月病院生活をしたことがある。スプーンで寝たまの味気ない食事から、始めてベッドに座ることを許されて、箸ではさんだお刺身の味、眼がしらに滲んできた涙を忘れない。

近作柳 柳

秀句鑑賞

—前月号から—

浜田久米雄

二次会へ引き抜く顔を目で数え

川上久司

たのしい引き抜きである。一座を見渡して
さて誰と誰に二次会の耳打ちをしようかと
考えている胸のうちは愉快である。やはり気
の合った、金離れのよい、飲ける口を持つ顔
に限られる。引き抜かれる顔はそれとも知ら
ずメートルを上げている。宴会が終りに近づ
くひとこまである。

ガタがきた身体へ今日も鞭をうち

三宅ろ亭

ガタが来ている自分の身体は自分が一番よ
く知っている。五十を過ぎ六十を越すと身体
のどこかにいくらかのガタがくるものだ。余
命のほどは神様しか知らない。余命のある限
り、ガタで動けなくなるまで動かねばなるま
い。家人には知られたくないガタを押し隠し
てきょうもなにかの仕事に取り組もうとする

老人の心境こそあわれである。

屁理屈を云うなと親父嬉しそう

森田カズエ

屁理屈は親父の云うところでおそらく屁理
屈ではなく筋のおつた話の内容に違いない
と思われる。自分の子がいつの間にかすく
くと成長していまでは自分の意見を堂々とぶ
ちまけるようになって来た。その意見に圧倒
されそうになる親父は屁理屈だと吐き捨てな
がらも心の中は子の成長に満足している。か
くあらねばならぬ親子間のうれしい対話であ
る。

目を伏せて女云いたいだけはい

守屋万 竿

目を伏せてがおそろしい。まともにこちら
を見ずうつ向き顔で思っていることを次から
次へと並べるのである。おそらく女の声は甲
高いものではなく、いとも静かに口をついて
出る女の主張に対し男たるものだまって聞い
ているほかはない。しんの強い女の片鱗がこ
の句の裏に潜んでいる。

薄命も困まり長生きでもこまり

両川 洋々

ままだならぬ人間の寿命がズバリまどめら
れた句だ。薄命もそうだが六十五歳以上が千
五百万とか、そのうち何割かが独り住居、そ
のうち何割かが寝たきり老人で救援の手が足
りないと聞く。平均寿命が上れば上がるほ
ど全国の各地にこまったことが起きている。

紅葉には紅葉に似合う帯を占め

武元 柳子

秋、紅葉、そしてそれに似合う帯。まこと
秋らしくすつきりした句である。春夏秋冬を
通じて季節に似合う着物が有り帯のある女の
暮しは最高のものであろう。これで不満があ
りとなればそれは罰当たりと云われるかもしれ
ない。

多数決川の流れに逆らわず

渡辺 南 奉

多数決という決め手が世の中にあるから事
が運ばれる。反対の気持があっても泣き寝入
りするのでなく逆わない心のゆとりが大勢に
順応してまどめられてゆく世の中であらう。

癌とは知らず退院の内祝い

安達 潮 音

深刻な句だ。癌の死亡率が依然減少してい
ないこの頃のこと、息を引き取るまで病名を
知らぬ本人、知らさぬ家族間の悲哀である。

西尾 栞 句 集

「水 鶏 笛」

送料共 六五〇円

垂井 葵水 築山 快夢起 辻 圭水 辻 白溪子 辻 喜仙 恒松 町紅 天正 千梢 遠山 可住 土岐 トク子 時広 一路 都倉 求芽 戸田 古方 友淵 貴山 飛田 好一 内藤 きさ子 内藤 幸子 仲 どんたく 中筋 三幸 中村 ゆきを 中川 淳子 中川 晃男 永尾 英断 中島 英子 中島 小石 中島 生々庵

柳楽 鶴丸 長野 文庫 永藤 弥平 永松 道雄 新岡 回天子 西尾 いわを 西尾 栗 西岡 青一路 西岡 洛醉 西川 誓二 西野 生長 西森 花村 西垣 錦風 西田 柳宏子 西出 一栄 野坂 つき子 野田 素身郎 能登原 白水 野村 太茂津 野村 味平 野村 岬月 羽原 静歩 浜田 儀一 浜田 久米雄 浜野 奇童

浜畑 胡蝶 林 葵丘 林 蒼蛇楼 林 瑞枝 林 夢紅 林 甦光 林野 甦光 原野 独仙 原田 明春 長谷川 三司 長谷川 義英 長谷沢 義英 馬場 夢生 馬場 魚山 久家 代仕男 久家 満秋 菱田 満秋 兵井 虎声 平田 実男 平野 青夜 弘津 柳慶 福井 野迷路 福井 多蘭子 福井 勝晴 福浦 鉄児 福島 鉄児 福田 丁路 福間 清夢 藤井 春日 藤井 一二三

藤井 明朗 藤岡 花梢 藤岡 三夫 藤田 軒太楼 藤田 茂美 伏見 茂美 藤村 女 舟木 与根一 古川 魔花麗 細呂木 魯木 堀江 正朗 本庄 金三 本多 清人 本多 惠二朗 本多 柳志 前山 北海 正本 水客 増田 次章 榊本 路児 松岡 委滄浪 松川 杜的 松川 たつみ 松本 梁水 松本 信三 松本 忠雄 丸川 初甫 間島 青丹子

満生 拜山 三井 醉夢 水谷 竹荘 水粉 千翁 光好 陽子 宮尾 あいき 宮川 珠笑 宮口 笛生 宮西 弥生 三輪 峰円 村上 旭童 村上 春巳 村田 瓢太 村山 光輪 室谷 徹舟 森井 菁居

森川 すみれ 森下 愛論 森田 茗人 森田 布堂 八木 千代 八木 摩太郎 保西 岳詩 山内 静水 山川 阿茶 山本 素郎 山本 立児 山本 照路 横山 一声 吉岡 青香 吉岡 通児 吉岡 美房

吉田 圭井堂 吉田 水車 吉原 紅月 和田 維久子 和田 一乃字 若林 草石 山上 千太郎 山田 季賛 和海 草春 若本 あき坊 若本 多久志 若柳 潮花 脇本 椰子郎 渡辺 暁童 渡辺 独歩 渡辺 乱坊

西出一栄句集

麻生霞乃先生監修

『ねっくれす』

送料共 六百円

非常ベル

辻 圭水選

非常ベルマンション中のドアが開、
非常ベルについて夜警もよくねむれ
非常ベルあつたんやがと事故現場
鳴らしたさ堪えた心の非常ベル
非常ベルの位置確めて床に就き
宿直の頼りにされる非常ベル
非常ベルこんな所で欠伸する
天井に小さく居ます非常ベル
非常ベル訓練と言う音で鳴り
非常ベルみち鳴つたドルシヨック
新入社非常ベルも教えられ
引越してうっかり押した非常ベル
こそ泥が肝をつぶした非常ベル
非常ベル鳴らしてみたい女風呂
知ってほし知らせ度くない非常ベル
落成の仕上げに非常ベルを付け
非常ベル噛み付くように鳴り続け
救命具仲々出ない非常ベル
気が急ぐが足が進まぬ非常ベル
本性をいきなり出さず非常ベル
非常ベルとうとう飯を食べそこね

和宏 可住 西合 七面山 カズエ 静歩 季賛 古方 木魚 仕代男 静泉 久司 信二 松花 国彦 国彦 一郎 素身郎
まだ酔わぬうちでよからず非常ベル
非常ベル心ばかりが先走る
幸せは使われぬ日続く非常ベル
非常ベルの位置も教えて入居させ
試運転へにこにこ押す非常ベル
訓練のとおり鳴らぬ非常ベル
非常ベルもしもの事故へ役に立ち
非常ベル鳴らないままに焼け残り
後手にしばられそこに非常ベル
非常ベルある気安さに事故起し
強盗が逃げて気がつく非常ベル
非常ベル近く宿直の夜を寝る
非常ベル押し落着き取戻し
非常ベル役立ち小火ですんだ幸
すぐそこに非常ベルある責任感
傷心を吹飛ばされた非常ベル
うろたえる手許にあった非常ベル
非常ベルふと懷中を確かめる
佳
もしの日は無いと信じる非常ベル
非常ベル付けて心も通い合い
非常ベルいつでも不眠症まだ続き
夢今や佳境のどこへ非常ベル
非常ベルつけて警備はしておらず
人
非常ベルやつと基石は投げ出され
地
非常ベル居留が先にとんで出る
天
新婚の堅さがとれた非常ベル
素身郎 隆子 翁童 翠月 保天 智司 悠泉 洋々 花枝 露夫 正子 富子 秀峰 綾女 与根一 鎮也 佳女 英詩 南奉 好一 軒太楼 輝親 信二 英子 梁水 素身郎

万的・杜的 共著 句集「的」

送料共 四〇〇円

軸

牌一つ持つて飛び出す 非常ベル

赤 字

石坂新雪選

新婚のムード 赤字に叩かれる
大晦日 赤字が消えぬままに暮れ
赤字はボーンナスプランの中に入れ
今月も赤字ですよと仲がよし
日本の赤字へ沖繩すがりつき
家計簿の赤字へ乳の出が悪い
汗臭い金で赤字も消えかかり
なるようになった赤字や気にし
ボケットにはほい赤字でないお金
下向いて働くほかない赤字
赤字路線お蔭でんびり旅が出来
バトロンに甘えて赤字埋させる
赤字ですすぞう算盤伏せている
辛抱も程々ですよこの赤字
赤字出た時だけ社員知らされる
赤字ですなどと儲けが減つただけ
与根一 止水 英子 初歩 静風 里女 佳方 古恵 柳住 不静 二歩 秀峰 木魚 曉風

ドルショック隣も赤字の増えた音
 労使いま歩み寄らせている赤字
 引越はしたが赤字もついて来た
 今月は赤字鼻唄の出る若さ
 へそくりはちゃんと天引して赤字
 晩酌の地位も危なくなる赤字
 原因を調らべて赤字ふやすだけ
 赤字埋めるつもりで赤を増し
 どうせ赤字ついで母へプレゼント
 赤字つづけよう喰つてるを税務署
 赤字とは見えぬ邸で鳴るピアノ
 赤字から出世が遅いぐちとなる
 補償費が目あて赤字のまま続け
 やりくりは赤字の中からひき出し
 長男は赤字わかつて呉れる歳
 億のつく赤字の上に利子が追いつ
 赤字でも平気な女房といふ不安
 赤字線の車掌で買物まで配り
 聞きあきた赤字へたつぷり寝るも
 繁昌はしても何んの赤字です
 ボーナスを手にしてやはり赤字

住
 税務署へ勇み足で行く赤字
 ジワジワと赤字がひびく来る四十
 倒産が高利貸にも出た赤字
 二輛目は空車で走る赤字線
 乗り降り客の名も知り赤字線

家計簿の赤字へ夫横を向き
 地 七面山
 見栄と欲赤字の裏にひそんでた
 祥月

春海 梁水 杜月 白汀 梁水 不二 恵子 敬一 寛彦 国彦 七面山 パット 洋々 古潔 静歩 初甫 季賛

産 院

石川侃流洞選

百姓の赤字一戸減り二戸と減り
 天 古 心

産院の洗濯槽のような風呂
 育児講習うけ産院を退院する
 三度目の産院先輩面をする
 産院の泣き声どれがうちの子か
 スマートになり産院の門を出る
 横町へそれて産院繁昌し
 産院へ来る男性の眼がやさし
 産院の出口で夫待たされる
 産院の廊下男の目が照れる
 産院へ男が来れば野暮に見え
 産院の廊下男の目が照れる
 二番目ともなれば産院軽入り
 五人目でやつと産院縁が切れ
 産院で目立たぬうちにおろして来
 産院の廊下威張つて腹を出し
 産院へ附添う母がいて強し
 産院へもう東大の夢を持ち
 産院の院長名付親になり
 取違えられて産院恐くなり
 産院の付き添い矢張り実家の母
 妻の世話産院任せ野良仕事
 産院の廊下で父となる不安

智司 章雅 軒太楼 曉明 杜月 春日 西合 久司 利美 洛亭 好一 代仕男 松花 翠月 静彦 国彦 伶郎 通雄 英詩

産院の一室うれしい母子無事
 番号の子と産院で対面し
 産院へ行かず故郷で産んで来る
 また女かと産院へ寄りつかず
 産院へ着いて落付き取り戻し
 産院を出て赤ちゃんは取り巻かれ
 産院へあずけて来た子にある不安
 産院のうぶ声日本を背負う声
 産院の無事へ読経祖母の声
 父子対面する産院のガラス窓
 産院へ来て産むまで編み続け

佳
 産院へ行くにも女化粧する
 産院でコントロールを教えられ
 同時出産もあり産院の賑やかさ
 産院のベッドでおがむ折褥札
 産院の隅で閑白かしこまり
 産院の医者にゆつたりかまえられ
 産院の壁は明るい色で塗り
 産院へ着いて安産だけ祈り

天 軸
 円上げはどこ吹く産院忙しい
 止水 古方 可住

祥月 南奉 古心 不二 秀峰 恵子 和宏 春海 富子 輝親

「老いの坂」

若本多久志句集

送料共 五六〇円

初歩教室

— 題「先」 —

本田恵二朗

信長に滅ぼされた祖先の自慢

静観堂

(信長に負けた先祖を自慢する)

女優? 明宏の指先女として喋り

同

(明宏の指先女として喋り)

階段の目先のボルノミニスカート

同

本教室の仲間の最年長者である句生の若者
のような感覚に先ずは敬意を表そう。明宏を
とらえ、ボルノを観賞なされるあたりは正に

二十台の若さであるが、驚くなかれ、八十四

才という年輪の持ち主なのである。川柳人

に年齢は無いが私はよく口走るが、それを実証

してくれるのが静観堂老人である。元軍医閣

下静観堂の悠々自適の源泉は川柳であると言

えると私は確信する。増々ご自愛あって、増

々々健康で、今年もご精進あられることを祈

るや切である。一同右へならえーである。

へボ将棋待ったをかけて先を読み 露 芳

(へボ将棋待ったをかけて先を読み)

旅通は先にチップを握らせる

(旅の通先ずはチップを握らせる)

軒太楼

人情にからまれ鉦先につけてき
先頭の歩巾に後尾引きずられ

(先頭の若い歩巾に引きずられ)

これで一段落だと煙草出し

(一段落先ずは一本吸いつける)

寿命まで計算に入れ先々を

(わが寿命計算をして先を読み)

ペン先も嬉しさ知ってるよく走る

先立つた姉の齢にきて想う

先争い特売場も命がけ

(特売場先陣争いめいている)

先廻りしてセールスが挑むなり

イメージへ先入観がじゃまなる

(先入観がイメージチェンジさせません)

その先は言えぬプライバシーに傷

(その先はプライバシーだと逃げられる)

見通しなく先も暗く年が暮れ

(先行きの暗いまま年が暮れ)

先駆けも人生の道一直線

(生きる道一直線に先駆ける)

先輩の連呼に割勘とは言えず

(先輩と呼ばれ割勘とも言えず)

先入観があつて半分だけ信じ

(先入観が話半分にして聞かせ)

空気水先進国はよう汚し

(先進国水も空気もよく汚し)

先例が石橋叩く役に立ち

(白足袋の爪先哀れラッシュ抜け)

(白足袋の爪先哀れラッシュにさいなまれ)

編針の先から母の味生れ

お茶席に先きに坐つて恥をかき

同 止 水

陽 山

静 子

千 夏

同 同

同 同

保 夫

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

同 同

(まづ先に坐つた茶席で恥を呑み)
先に行く孫へ老婆の息が切れ

(先に行く孫へ足の老いを知る)

この先は有料ですと欄が言う

(弱身があるから先につかかり)

弱身があるから先手打つて出る

(弱身があるから先手打つて出る)

出すよりも先に処置無いですわ

(出すものを先に処置されて恐れ入り)

先生に出会えば頭白髪なり

(先生も僕も白髪で久し振り)

焼きたての鯛先ずのめ舌つづみ

(総入歯鯛先ずのめ舌つづみ)

口先の上手につられて買つてしま

(口先の上手にまんまと買わされる)

先様の喜ぶようなお歳暮

(先様の趣味に合せて選る歳暮)

先づれをしては後悔してる人

(先づれをして後悔をもちろて来)

先約があるとしてほどよく断わられ

(先約があるのよとひじ鉄を貰い)

冬枯れの枝先に錆びた太陽

(枯枝の先で太陽が錆びている)

一連の句の感覚は佳し、叙法が未完で失敗。

先達の読経に山の大气澄む

先々のことをくどくど細い声

先代の遺訓を盾に社の彦左

その先は読まずと知れる無心状

真先に悪友献血申し出る

もう先が見えてる母へ逆らわず

先生と呼んだ昔がある夫

英 詩

同 童

翁 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

同 童

真先に犬がじゃれつく里帰り
 後先のわきまえもなくすべる口
 損の無い時だけ先輩面をする
 催促と読んでペコペコ先手打ち
 ご先祖へ入告げる子に育て
 ボウリングお茶やお花は先のこと
 廻り道して来た方が先に着き
 先達になってあかぎれの手を見つめ
 伝言板先きに行ったと孫の文字
 先棒をかついで首をちょん斬られ
 お筆先き金釘流に頭下げ
 先口がやっぱりあったしとかさ
 先読んだつもりがその先読まれてた
 その先は互に禁句唾を呑み
 旅先の妻の電話は火の用心

誓二 先頭が走るあたりに湧く声援
 同 先様はちつとも知らない恋である
 同 墮ちるだけ墮ちてその先考えず
 露杖 口先のお世辞に負けたまとも貸し
 同 行き先も告げず甲斐性なしが消え
 同 先生を小馬鹿にしてる反抗期
 同 その先を早く聞きたい酒をつき
 同 春海 私はサテどうしよう煙草の輪
 同 熱中している。川柳は作らなくても、川柳を
 同 玩味することの好きな人を、一人でも多く作
 同 ろうと願うての行動である。その成果は、た
 同 しかに挙げられまた挙げられつつある。私の
 同 同業（歯科医師会）に浸透し、私の所属する
 カズエ ライオンズクラブに浸透し、警察署にまで広

がっている。そして現在勤労青年ホームの協
 力グループへ手を伸しつつある。川柳を玩味
 することに興味を持ち始めた人達の中には、
 作句の道へ歩を進めた人も沢山にあるから、
 一層にうれしい。昭和四十七年、相変らず
 それを推進して行くべく張り切っている。
 それは、私自身の作句意欲と同格の意欲だ
 と思っている。本教室の仲間の皆さんが、前
 向きの姿勢で、張り切って、作句街道を歩き
 続けられることを祈って止まない。

題一好一二月二十日締切（四月号発表）
 宛先 岡山県倉敷市下津井三五二番七十一
 本田恵二朗

▼八尾支部菜の花句会如月例会。とき二月十
 四日（月）午後六時。ところ八尾の天神さん
 一題・素顔・二・寒い・傷口。
 ▼南海川柳会。とき二月十七日。ところ南海
 電鉄本社食堂内一題・歩行者・出直し・悪役
 ▼南大阪川柳会。とき二月廿一日（月）午後
 六時。ところ松崎町二丁目、以和貴荘。一題
 ・古参・残り火・好奇心・民宿。
 ▼川柳東大阪。とき二月二十六日（土）午後
 六時。ところ近鉄永和駅前中央公民館二階。
 一題・縮む・阿倍野・影・飛ぶ。
 川柳塔社八尾支部菜の花句会
 白浜一泊一周年記念川柳大会
 昭和四十七年三月十一日（土）十二日（日）
 所 白浜温泉『大既荘』

兼 電話（〇七三九四二）二三八五
 題 「鐘」 垂井 葵 水 選
 「蛇」 阿万 萬 的 選
 「綱」 橘高 薫 風 選
 「石段」 大坂 形 風 選
 「巡る」 菊沢 小松 園 選
 「娘」 西尾 栞 選
 席 題 三題は車中発表
 ◎スケジュール
 三月十一日（土）九時紀勢線天王寺駅改札口
 集合。
 九時三十分発 きのくに三号乗車
 十一時二二分 御坊着。道成寺参詣
 十三時三六分 御坊発きのくに五号乗車
 十四時三六分 白浜着

十五時『大既荘』着。直ちに入浴。
 十六時より 大会開催
 十八時より 宴会
 十二日（日）朝食後希望者による泉都観光
 十五時三十分 白浜発（黒潮三号）
 十八時三十分 天王寺着 目出度開散
 会 費
 金四、〇〇〇円 内訳一宿泊費二、〇〇〇円
 （二食付夕食は海の幸の豪華版）
 交通費 一、九〇〇円（往復）雑費一〇〇円
 申込締切 二月本社例会場にて御返事下さい
 ▼岡崎祥月氏（松江市参事）は旧うら二
 三日来阪、形水・一三夫・葉子諸氏と心ブラ
 後、ユーハイム喫茶店で柳談。翌日帰松され
 た。

大 萬 川 柳

「初 耳」

入選発表

選 者 川 村 好 郎
 投句総数 五百六十八句
 入 選 五 十 五 句

大阪形 水
 初耳は自分だけらし座の空気が

大阪好一

恋う人の過去初耳にしたショック

岡山止 水

質問へ大臣初耳らしく呆け

堺 天 笑

ひまそうな顔で初耳持つてくる

和歌山 正 夫

初耳のそこに火元のある噂

笠岡 遠 二

初耳でしたと治ってから見舞い

富田林 美 代

動悸かくして初耳でない演技

倉敷 梁 水

初耳のそぶりで懺悔聞いてやり

大阪 保 夫

初耳へよってたかつて皆なだめ

堺 一 三

初耳を笑い打ち消す手の震え

大阪 栄

初耳がテレビを消して聞き直し

大阪真砂
 仏前によい初耳を報告し

堺 青 香

朝礼で初めて知らす社のピンチ

大阪雄 峯

初耳へブン屋の勘が承知せず

倉吉 弘 朗

初耳と逃げてはみたが悔い残り

米子 千 代

初耳を耳打ちで聞く日の苦悩

大阪水 客

敬遠をされてる初耳とは知らず

藤山 近 江

初耳を知ったかぶりして聞く強気

守口 笑 風

初耳を云ったり聞いたり久しぶり

今治 青 女

違反して初耳ですとはけておき

羽曳野 可 動

初耳のネタを秘曲で奏でんか

兵庫 可 住

初耳へ鏡見るのが恐くなり

岡山白 水
 初耳をピンクに染めるいい話

大阪新之助

初耳にしとく耳打ちされて出る

倉敷翁 童

初耳でしようでしようとなふれ歩き

倉敷千 翁

初耳でしようともったい振つても

平田 代仕男

初耳に尾ひれをつけてはすむ酒

榎原 本蔭梓

期待してきたが初耳驚かず

郡山カヅエ

初耳にしては理解の早やすぎる

米子瑞 枝

初耳の愛情既に子も生れ

大阪文 秋

同情的湧く初耳の懐古談

大阪文 秋

乗り出して聞く初耳に落ちがあり

大阪あいき

初耳の顔でマダムは如才なし

大阪あいき

美容院での初耳銭湯で話し

大阪智 司

夫のスキヤンダル初耳の顔で聞く

大阪智 司

初耳のエピソード聞く通夜の席

大阪智 司

早耳が初耳の顔期待する

大阪智 司

初耳の疑惑にかける好奇心

大阪智 司

初耳にそうだったかと謎が解け

大阪智 司

初耳へマアマアアの顔が寄り

大阪智 司

初耳へ女妬心をのぞかせる

大阪庸 佑

初耳ではないなと判る受け答え

大阪庸 佑

わたしだけ初耳だった社の人事

大阪庸 佑

初耳は心の奥へしまったとき

大阪庸 佑

初耳はそれから小さい声になり

大阪庸 佑

初耳へソロバン弾いている微笑

大阪庸 佑

初耳へ私も被害者の一人

大阪庸 佑

佳 句

松原 万 竿

義理の仲初めて聞いた日の乱れ

松原 万 竿

初耳ととぼけ祝は出さぬ肚

松原 万 竿

老いの繰り言へ初耳になつてあげ

松原 万 竿

初耳を集めて女旅たのし

松原 万 竿

それからは聞かず初耳飛んで去に

松原 万 竿

人ノ句

倉敷 里 風

初耳をたしかめ合っている受話器

倉敷 里 風

地ノ句

松原 重 人

初耳へ女うれしい線になり

松原 重 人

天ノ句

島根 文 子

初耳へ愛の言葉も添えて母

島根 文 子

柳 界 展 望

あちらからこちらから
お便りを待っています。

(橋高薫風・担当)

▼中島生々庵主幹は一月八日岡山県邑久町の岡村久志良居で本田恵二朗氏らと歓談、翌日の第六回岡山県川柳大会に選者として出席された。薫風随行。

▼昭和四十六年度平安賞、一般の部に天根夢草氏(伊丹市)ハガキに字すくなく書いて卑怯者「春の宵おんなは御者を失いし」同人の部に前田夕起子さん(京都市)夏風邪に音沙汰のない人ばかりよれよれの心に纏いたくて編むよが入賞、一月三日の平安新春句会で受賞式が行なわれた。

▼昭和四十六年度ますますかと賞が発表になった。黄薇賞、片岡もと子(総社市)怒らない熟柿のような祖父であるー美しい嘘をネクタイピンにするー百花賞、川

端英策(伊勢崎市)反抗期触れればはねる鳳仙花ー風邪で寝てからのドラマが好きになりー

▼岡山県文学選奨川柳部の受賞者は盲人の斗病作家島洋介氏と決まった。白い杖握って摂理とは何かー

▼第十七回全国川柳作家年鑑の公募要項は次の通り。一、句稿、姓雅号(ふりがな)年令、職業、郵便番号都道府県名、住所、作品十句(新旧作品いれずれも可)二、参加費 七百元三、締切 四月末日四、年鑑には全国川柳社名鑑が附記、七月下旬発行五、投稿先 631奈良市西大寺町見町一の一の四一一伊藤勢火宛。

慰霊川柳大会は昭和四十六年十二月二十六日(日)新潟市の円応寺会館で開催。▼番傘折鶴川柳会二十周年金泉万葉句集「北はま」発刊記念川柳大会は三月十九日(日)正午から大阪府立青少年会館(小ホール)で開催。兼題 音痴・猫う・善意・花曇り・デート・寝台車・客・舞扇・大阪、各題二句、投句は二百円封入して三月五日までに、懇親宴(千円)希望者も三月五日までに58大阪府住吉区墨江西六の一岡崎はるを方、番傘折鶴川柳会宛。

▼昭和四十七年度知事杯争奪北海道川柳大会は昭和四十七年七月二日午前十一時から滝川市役所会議室で。兼題、限界・対照・記憶・中心・薄倖、並びに特別参加作品雑詠二句(新作に限る)、投句料三百円、四月三十日まで滝川市栄町一八三竹内茶目坊方滝川川柳社宛。

▼昭和四十五年度垂天賞が発表になった。表を又持てというから義手を出し 相沢学人 準垂天賞作品 伏字の上を歩かせられいるオキナワ 佐藤夢痴夫

寒 中 お 見 舞 い

会 川 柳 鱗 魚
川 川 鱗 魚
市 井 高 瀬 清 恵 楽 子

▼第一回島根県川柳大会記念号は昭和四十六年十一月二十五日島根川柳協会から発行された。

六年十二月一日発行の十二月で二百号になった。

▼みなと二百号記念川柳大会は三月十九日(日)正午から名港海運ビル九階会議室で開催。兼題、草分け・進水式・燃える。水中翼船・視界・乾杯、各題三句、

投句は百円封入の上、二月末日までに55名古屋市港区高砂町六の五吉原辰寿宛。

▼山川阿茶女史(大阪市同人)は医家芸術十一月号へ「文案こぼれ話」を執筆、

さすがに粹人女医の面目躍如。「週刊文春」十二月二十七日号、

田辺聖子の「女の長風呂」へ川柳登場! 足を腰をきたえきたえてガンで死に! 阿茶。

▼水島川柳会から水島川柳二十周年記念川柳大会号が十二月に発行になった。

▼第二十三回大阪文化祭川柳大会作品集が発行された

▼かがみ句会は三月二日夜池田古心居で。兼題、禁煙・注文・横文字。

▼岡田甫先生(鎌倉市)の著書「川柳東海道」二冊が今年に読売新聞社から発売される予定である由。

▼池田可宵氏(長崎市)は二月十一日から神戸のそこので、三月二十日から大阪の大丸で新春のれん展開催の予定である。一日ののぼる山のうしろも海と山」

▼若本多久志氏(西宮市同人)は十二月十六日付サンケイ新聞夕刊のわたしの文芸ノート欄へ、「ポーナスと川柳」を執筆、川柳家経営者の一端を披露された。

▼渡辺曉童氏(愛媛同人)から「孫五人が全部女でしたが、十一月二十八日長男に男子が生まれ、教と命名、

新同人紹介

板

尾

岳 人
(凡吉改め)

―柳太・摩太郎推薦―

はじめての男の孫に恵まれました。」

▼岡村久志良氏(岡山県同人)は自宅の庭に九種類ほどの椿を植えておられるが十二月一日の亡母の忌に、

曙という椿が、今季はじめて立派な花をつけたので、

仏縁かと喜ばれ、以来花の句ばかり作句して、おられる

▼永尾英断氏(兵庫同人)の母堂が十二月二十三日逝去され翌二十四日葬儀が営まれた。謹悼。

▼東野大八氏(美濃加茂市)から、「ただ今東京に滞在五日目。新宿で友人とうなぎのフワケを喰っている折しも天地にとどろく轟音一発。例の新宿は追分駐在所吹っ飛ぶ。とんだイブのプレゼントでした。」

▼村上春巳氏(姫路同人)は一月元日を瀬戸の海で迎え、道後温泉へ。子規堂から、「幸せは道後の宿の初便り」と寄信された。

▼水粉千翁氏(倉敷同人)の令嬢に女兒出生、おじいちゃんになられた。

▼川端柳子さん(岡山市同

人)は交通事故での傷のあとが十二月の冷えて痛み出し閉口しておられる由。

▼竹内翁童氏(倉敷同人)は十二月九日訓練生の募集で山陰に出張、皆生温泉に遊ばれた「羽根伸ばしすぎた出張の精算書」。

▼小笠原青女さん(今治市同人)宅が十月七日、隣家からの出火のため類焼、てんやわんやの毎日だったとのこと。やっと再建にこぎつけてほっとしておられるお見舞い申し上げます。

五日には高松、琴平、屋島と巡遊、古寺と御陵巡りも佳境に入るところ。十二月十三、十四日両日は山陽新幹線の工事も完了同様と下呂温泉へ。十六、十七日には新幹線に試乗、線路調査をしての燕返し。

▼北川春果氏(枚方同人)は薬品宣伝誌に十二月号のグラビアに川柳のたのしみを掲載、路郎先生の「皆呑んでるぞビールが散るぞ夏」の手拭や、春果作品の揮毫が紹介された。

花 公 栄 社

富田 林市 富田 林町 24-4
TEL 07212 ③ 2064

兼題「カレンダー」 菊沢小松園選

一年はこれだけですとカレンダー
大晦日 男はカレンダー 替えただけ
新しいカレンダー まっさき旗日繰り
追いかも必死カレンダー 余日なし
カレンダー 今年は何を醸すやら
脱いでは今年売り出すカレンダー
元日は惜しくも土曜日と出たり
カレンダー 屠蘇の機嫌で年の計
日めくりの大安 毎に来る仲人
日めくりの旗日ながめて小商人
浮き沈み回るスターのカレンダー
真正面 銀行のカレンダーを張り
カレンダー 日本の四季がまだ残り
肝心の 社名かくれたカレンダー
カレンダーにしろがふえて愛進む
カレンダー 会社の趣味がうかがわれ
カレンダー 一枚になってあわててる
銀行のカレンダーばかり 応接間
独り者 囲むスードのカレンダー
飛び石を先に数えてカレンダー
カレンダー 明日へ希望の手でめくり
カレンダーの裸モデルにも四季が
カレンダー 故郷に帰る日を数え
カレンダー めくり忘れた三か日
カレンダーの花にも四季の香が匂う
年頃は隠語だらけのカレンダー
カレンダー 日々反省のこぼれ
カレンダー あと四五枚はほととかれ
カレンダー へ 女女のプラン持つ
カレンダー 貰うものだと思ひこみ
日めくり をまとめて破る旅帰り
カレンダー 三和と住友にち合う
カレンダー 人生無宿に用がない
逢うてきた 印が派手な カレンダー

久松 生々庵
久松 軒太楼
久松 一栄
久松 藤風
久松 旅風
久松 野迷路
久松 葛城
久松 千代子
久松 静馬
久松 トメ子
久松 メ子
久松 滋佐
久松 庸佑
久松 千子
久松 萬子
久松 好馬
久松 静馬
久松 一馬
久松 花梢
久松 智雀
久松 滋雀
久松 三夫
久松 一三夫
久松 水京
久松 千子
久松 万子
久松 形水
久松 庸佑
久松 新之助
久松 六三夫
久松 一龍
久松 三子

色紙短冊
書画用品
大坂戎屋しるし
丹青堂
を申せし、せし

右端ばかり買ひ続けている宝くじ
宝くじそりと妻も師走の宝くじ
宝くじこれにも数字の好き嫌い
落したのが当てていそう宝くじ
夢見よい朝だから買う宝くじ
宝くじ師走の風へ振り向かず
宝くじ当らぬまでもそれでよし
残り福売り切れまざわの籤ねらい
パチンコに負けて今度は宝くじ
ちと酔うてバラ銭で買う宝くじ
あたらぬときめて買つて宝くじ
その夢を正夢とする宝くじ
宝くじ当たらばなんにどないしも
買ったまま忘れて居つた宝くじ
こつそりと社長も買った宝くじ
下積みの欠かさず宝籤を買い

席題「口止め」 岡橋 宣介選

口止めをしてばつばつと話し
口止めをしたばかりに喋られる
口止めをされたけれど喋べりだ
念には念入れて口止めに喋べれ
口止めの金一封を捻じ込まれ
口止めのハンドバッグが疑がわれ
口止めのつむりのキツさ癖になり
口止め料コヒー一杯といふ秘密
マダムまで入れて口止め高うつき
口止めを頼んで一借りが出来
口止めを心得女将如才なし
口止めをすればみじめな思ひする
こだけの話ですよと酒が出る
口止めをされてるらしい眼のやり場
正直に口止め守つて出し抜かれ
そこからは言つてはいかん咳となり
口止めをされてむすむすする若さ
病室へ口止めされた顔で来る

季 替
圭井堂
千子
柳安子
小松園
綾女
小松園
一三夫
摩太郎
文秋
つき子
慶之助
新之助
静水
葵馬
凡吉
一三夫

静馬
梢
誓
あいき
小松園
文秋
小松園
季 替
生々庵
鬼遊
万の
千寿子
一三夫
敏
柳水
志
牧人

— 57 —



▼原稿用紙にペン書き。文字は楷書。締切は25日着便。書式は発表誌のように。

金井文秋担当

岡崎祥月還暦祝賀川柳大会

脩上げにそつと手を貸す好敵手
地すべりのあと山々は無言なり
還暦を寿ぐ言葉和一の口
甘党のけつこう酒もいけるみ
ユーマアがとんで四角な座が和み
ヤッホーを返し山脈若返える
山脈に抱かれた平和谷間の灯
人の和がこんなに楽し趣味の会
甘党は甘党なりに金がいり
小企業働くだけがマイベース
ひたむきな恋が崩したマイベース
子が一人生まれて家に和が戻る
敬老会和気あいあいで会終る
甘党は先ずお茶の味賞めておき
脩上げをおり手放しで泣いた顔
マイベースこの椅子へいま辿りつき
和洋折衷ババマおじちゃんおばあちゃん
人間の脆さを犬の尻尾知り
マイベース他人のテンポ見ておらず
箴竹に問う人間の弱さなり

一保路生惠子
静泉南子
秀子
芳子
多加子
狂太
亀太
ツル
英子
雨子
敏子
叮紅
与根一
晃男
鶴丸
軒太
孤呂二
通児

山脈は歴史を語り生きている
いきさつはざらりと和解の酒の味
スタートのおくれを戻す腕つふし
公約のスタートいつかほけて来る
一円もさい銭箱に湯気をはたれ
スタートに鉢巻をして見捨てられ
山脈はとがり出湯のあるところ
マイベース仲間外れと思う日も
一円貨ならべ窓口おどろかせ
耐える術拙なし模範の貌となる
我が意見曲げぬ気骨のマイベース
脩上げは汗と男の匂いして
番号で呼ばれ人間落ちぶれる
誤ったスタート中期の不遇
恐妻の和に平凡な日を送り
脩上げで若さはげます部屋頭
耐えて来た戦を知らぬ娘とあわず
子と対話はずむ茶の間の灯に溶けて
スタートの遅れお孫さんか聞かれ
こまでを夫婦で耐えて笑をとじ
耐える事書いて家計簿の夜をとし
還暦を若くスタート詩にあふれ
暴言に耐えた心にあるゆとり
少し背が曲ってからの人間味
人間を無視して近代化が進み
人間の心臓までも売りが浮き
じいちゃんの還暦平和なわが浮き
マイベースガタンと動くローカル線
身を削る想いくたび死線越え
ゴールイン見もマイベースのピッチ
人生のスタート遅れ踏み迷い

雪美
俊明
無閑
愚童
巡歩
素子
桃詩
きみえ
舞吉
苑花
一実
快人
鉄花
澄水
明朗
小茶坊
花子
千代
瑞枝
河津
多一郎
四希
青湖
弘朗
新雪
柳慶
巷雨
代仕男
湖楽

果てしなく続くレールだマイベース
コンピューター人間亡ぶかも知れず
皮肉にも耐えて微笑をすて見縁
株で損した日山脈ひくく見え
いつか芽が出る時信じひくギター
欲得のない人間がいの怖さ
貧しさに耐えて少女の母思い
脩上げの優勝までを噛みしめる
マイベース保険医一人辞退せず
人間が丸く出世に遠くいる
人間は信用出来ぬ判の数
戦争を知らず育つたマイベース
脩上げに見せた華麗な恩がえし
日本に一元という基礎価格
甘党に惜しい新茶の入れ加減
一元も金だ並べるコップ酒
雪に耐える山里の屋根肩を寄せ
甘党の甘ければよい訳でなし
自信満々スタート台にある余裕
漬物の蓋閉め切って耐えている
心の和とチームワークが崩れない
虎視眈々人間臭ささがのぞいてる
雲に乗る心地脩上げ無にかえる

南大阪川柳会

金井文秋報

その刹那女心は逃げて
押ピンを捜す間の孫を抱き
アツと云う事故にも母は子をかばい
大阪の匂いめしとズバリ掲げ
テンポ乱れよう行状にチェックする
父の無い子にせめて疲れた歩は見
ゆつくりと合々テンポにあるゆとり

可動
日満
鈴子
酔鳴
鵲生
翠生
秋生
旅人
車揚
白雲
昇雲
正人
白汀
天痴
紫人
緑助
万郎
午郎
忠美
風石
小石
生々
祥月

お互いのテンボを笑う年になり
押ピンの頭が邪魔な明細図
定退に朝のテンボを変えさせ
食堂でど馳走さんなじみ客
間髪を入れず役人天くだる
賑やかな彼が無口でいる疲
札束の山へ利那の出来心
ノイローゼ患者の間に骨が折れ
利那主義ほんほん明日を考えず
折れて出るつもりへ周囲が
嬉しい日テンボはずれたまま唄い
芸達者音痴のテンボ受けて立つ
疲れたと云うた好意が嘘になる
糊持て来いと押ピンかえさる
昇給のテンボ物価に追いつかず
おしゃべりに疲れたらしく虫を誉め
賃上げへ物価はテンボ上げて逃げ
倅はテンボ合わせて共白髪
世の風に当る利那の孤々の声

南大阪川柳会 金井文秋報
肝心なところ削られた原稿紙
貸してやる方は苦言と思つてず
下っ端の意見が通る社の落ち目
母子連れの押売りミルク代にふれ
磨かれる石削られる石が拗ね
数珠提げて来たが断絶救われず
たぐつても数珠に終りのない悟り
あの時の服のポケットにあった数珠
後列の隅で下っ端写される
良薬を顔全体で服む苦さ
老いてなお下っ端程の役に立ち

警二 小松園 綾女 一舟 醉々 凡九郎 肖二 儀一 新之助 喜風 文秋 金三 千梢 静馬 葵水 牧羊人 栄雅 章雅

鉛筆の削り具合も姉いもと
荒削りな頃からスカウト目をつける
百万遍の数珠の重さに業を知る
下っ端の髪おだてられ奢られ
かかる時怒つてならぬ数珠にさる
下っ端の声は途中で押さえられ
下っ端ではラチがあかない程こじれ
ブル削るあいだも伸びる草の芯
数珠だけが私の虚勢を知っている
佗と寂消して地球の皮削る
無理しても倅祈る七五三
ドルショックボナナス削れる削り
七五三主役がママに変わりそう
削て削て削てしてもたらひも
鉛筆を削るナイフで柿をむき
念珠手にうつらうつらと聞く法話
チラチラ意見が混じるにがい酒
身を削る思いでへそくりさらけ出し

ワイロー社(ハワイ)

貧よりもつらい義理とは古語なりき
義理故に泣きたいらさる過去夢
見送りもレイ一本で義理すませ
義理の子にギフト忘れぬクリスマス
人情に負けて成らぬと義理を立て
破局とはこうも空しい義理と意地
泣きに出た義理へ今宵の月清し
義理の仲とは思わせぬよい姑娘
落ちぶれて義理も欠くなり遠く居る
初恋をもてあそばされて義理を捨て
義理にでもそんな非礼は言えぬ柄
義理の二字忘れて今はエゴイズム

小松園 金三 綾女 儀一 文秋 新之助 悦郎 あいき 太茂津 喜風 水京 君子 古方 肖二 静馬 栄一 好一

人情に筋を通して義理をたて
我が子より義理で育てた子が慕い
義理人情明治と共に影ひそめ
留守中に妻の機転で義理がたち
大げさに義理の安売り持つてくる
川柳ささやま 河原みの報

秋日和団地は毛布の展示会
様ざまな尻の重みを毛布知り
半値ならと値切った毛布買われる
愛つつむ毛布の方が燃えて来る
色あせた毛布に日本一の母がいる
身元不明悲しき毛布の夜が明け
優勝の補欠は隅にちぢこまり
補欠でもよし母としてほめる
補欠という名で最後まで座られ
菊鉢へ犬遠慮なく足を揚げ
秋と云うイメージから菊遠ざかり
名案に祖母の知恵借る家平和
名案は成立鳩首立ち上がり
ハタと手を打って話題を変えてみる
名案はほとんどの髪をときながら
トンキョウの名案を生みおとし
誘い水だったと気付く迄の距離
また来ますと言ってお客は霧の中
正直に年齢が行ったアと久し振り
割勘になつて補欠も引っぱられ
まるべに川柳会(大阪市)

雪女 公女 紅溪 柳子郎 暁舟 緑村 雨村 可住 昌宏 越山 八陣 古仙 素水 百合子 近江 初音 清香 富士子 雅佐女 無鬼 とおる

別れたひとしみ悲しき秋夜長
渡り鳥去るも悲しき秋の空
柿の葉の丸みもやさし母おもう

瓢太 星斗 慶子

小男はせいっぱいに足を組み
意中の一人あり純粹に燃えられず
一本の柿の木残した造成地
秋ふけて茶景の中で人おもう
スネかじる方が太くて長い脚
老人のひがみ別居でも同居でも
好郎 児子

限りある命を知るか虫が鳴き
限界を知りつつ首相席空けず
好郎 文作

ふるさとの柿礼状も書き忘れ
与呂志
堺・若芽合同川柳句会
八木摩天郎報

風向きにかかわりもなし忠魂碑
切り下げへ二田玉が陽の目見る
風向きを避ける面会謝絶なり
風向きを電話でただし飲み直し
ネオンの灯デノミに遠慮なく灯り
風向きが変った愛がはしたなく
風向きが変わる気配に座を外し
風向きを見ながら靴のチャック開け
へそくりはダイヤに交もデノミ待ち
札東に女風向き変えてくる
風向きが変り仲裁のろけられ
重役の椅子へ風向き真正面
デノミへと身構えるほどあればよし
風向きを突然変えた社長秘書
デノミにも変ることなくドヤは昏れ
温泉へ来ても風向きうかがう身
一円が明治の音になるデノミ
小松園

腕時計見えてから男演技する
腕時計はずせばどつと出演される
千金の朝寝を時計容赦せず
ドルシヨックどこ吹く風の樽御輿
ドルシヨック会社社にまかす飲みぶり
支払いへ口実となるドルシヨック
初出社時計のネジも巻いて寝る
目覚しと相談しているひとりもの
退社前時計ばかりが気になって
文虎

宮地双葉追悼句会
星のあるうちに起きてた立志伝
流星を見送るわれにきみの声
流れ星おとぎ話の腰を折り
一番星父は職場の鬼だった
あの星の中に私の座る椅子
満天の星に願いは小さすぎ
ふるさとは先祖の墓があるばかり
ふるるの便りは土の匂いする
隣席の柳友は今亡く夢と消え
変貌のふるるに來てふと迷い
旧姓で呼ぶ友と逢うくにの辻
成功もせずふるるにうとまれる
左遷でもよいふるるにうとまれる
ふるるは今年も基地のままで暮れ
二人三脚大きな夢を追つかける
夢の中にやなお方にキスをされ
胃を病んでまた食い物の夢で醒め
星負うて新聞少年夢多し
倦怠期どつちも浮気してる夢
夢を見ていたことにするコンパクト
老母の夢見たと安否を書き送り
感想を問えば一言夢のよう
角帽に夢ははてなし駿河台
宜途へも和の筆提げて行ける幸
和の色紙雲の峰より笑いかけ
和に徹しお子達までが和のコンビ
白柳一周忌追悼句会(堺市) 八木摩天郎報
地獄ですと云うて結構に暮してる
維久子

— 60 —

風向きにかかわりもなし忠魂碑
切り下げへ二田玉が陽の目見る
風向きを避ける面会謝絶なり
風向きを電話でただし飲み直し
ネオンの灯デノミに遠慮なく灯り
風向きが変った愛がはしたなく
風向きが変わる気配に座を外し
風向きを見ながら靴のチャック開け
へそくりはダイヤに交もデノミ待ち
札東に女風向き変えてくる
風向きが変り仲裁のろけられ
重役の椅子へ風向き真正面
デノミへと身構えるほどあればよし
風向きを突然変えた社長秘書
デノミにも変ることなくドヤは昏れ
温泉へ来ても風向きうかがう身
一円が明治の音になるデノミ
小松園

湯の町の安眠破る酔うた下駄
ただになる筈のキッスをもて余し
はったりが其まま通りこわくなり
下駄裏の鈴がなってる七五三
ただ無心お点前の湯たざりおり
靴下のつかかけ下駄は泳ぎ出し
はったりをそうかそうかと聞いて
そろばんをはじいて船場の灯に生
折角の噂が惜しいただの仲
仲人の下駄すり減らす生返事
はったりの微笑は腹の中見せず
はったりも身につき二代目店を継ぎ
旅に出て大阪の味恋し増え
紅葉へ皮算用の店が増え
はったりをかまして世間うまく生き
逆光の大阪城にカメラ向け
はったりをかました交渉成果上げ
もみじの手しっかりと握り呱呱の声
文作

白柳一周忌追悼句会(堺市) 八木摩天郎報
地獄ですと云うて結構に暮してる
維久子

極楽の風で寝ているアッパッパ
極楽は心の中にまだ住まず
極楽へ来て退屈な日が続く
極楽に往けそうになし高利貸
極楽を先取りしたい宝くじ
極楽を肌で感じる湯に浸り
団交の鼓膜に河内弁ささり
教室を出たら先生も河内弁
河内弁も着替えて出れば標準語
スタイルは昔屋マダムで河内弁
団地の子がおう河内弁使い
幼稚園から河内弁で育てられ
河内弁抜けぬ妓が来て席が湧き
街ひらけ影薄れゆく河内弁
河内弁の漫才へ河内弁怒り

徳子 宏子 左久良 摩太郎 文秋 天笑 葵水 誓二 清涼 知子 千寿子 青香 笑痴 柳太
ハンカチの香りに妻の推理めき
ハンカチで童話が出来る幼稚園
ハンカチも持たずGパン長い髪
汽車が出る涙拭いてる母がいる
ハンカチも紙も忘れた鼻づまり
い匂いするハンカチで揉めている
ハンカチのルウジウのしみを疑われ
使わないハンカチもいるモーニング
ハンカチを出すホステスにある打算
職人のぶっきらぼうな生ま返事
労基法がどうのと職人火をかこみ
一寸手をつけて職人出て来ない
職人の気嫌をそねてお茶を出し
職人の顔は工場においてくる
職人の腕をギヤラは知っていた
弥栄子 草春 柳信 南柳 吉太郎 つき子 儀一 今雨 雄次郎 敬三 一二三 花梢 美代 夢成 筑前

雅号ぶっちゃけばなし (89)

きゆう



たかすぎ

高杉 鬼遊

本名、久(ひさし)を音読キユウを転じて
鬼遊の文字を当てる。性質至って弱くそれ
を補うに鬼の強さを借りるも人さわりに角が立つを畏
れ遊びへ逃れる、かかる優柔不断の男の子なり。愚妻
最も鬼の文字を嫌うも、それはうわべのことなり、強
きを好まぬ女この世にありけるか。秋に毒舌を以って
師を甫め先輩諸兄姉の心を脅かす所業の数々不徳の至
すところなり。これより過去の罪業を雪がんと、和と
愛を二本の角に掲げ川柳道に遊ばんと念願する次第な
り。

欲すててそれより鬼の角まるむ

鬼遊

(会社員 五十一歳)

よう出来た時も職人だまり込み 一舟
一合の酒に職人寝てしまひ 小松園
南海電鉄川柳会(大阪市) 辻圭水報
かけっこをしてバス停へたどりつき 柳信
バス停へタクシー速度おとしみ 圭水
過疎の村淋しくバス停だけ残り 双葉
バス停の間に無気味なサンダラス 儀一
バス停で今朝も焦慮の列作る 誓二
バス停が変り売れ行きも変り 宏子
車庫入りのバスへ長らく待たされる 金三
川柳東大阪 竹中肖二報
肩叩く孫のおねだり聞いてやり 和哥水
棟梁も叩き大工と云われた日 秀信
肩叩き合って余生も睡まじい 文月
評論家褒めて叩いて金になり 思秋
また酔うて帰ったらしい叩きよう 明風
墨汁をぶちまけこれも芸術か 湖風
一筆を請わるるままに墨をする 大丘子
墨色にわが運命がにじみ出る 一声
寿の墨倅せを祈りつつ 鬼遊
墨痕淋漓美事に書いた無心状 小松園
菊人形静の袖の小菊かな 竹堂
悪役に美しすぎる菊人形 弘生
倅せな虫菊人形の袖に啼き みつゑ
せめて夜は菊人形も寝てみたい 萬楽
弁慶がしおたれている菊人形 三郎
ねむたいが横になれない菊人形 鎮彦
菊人形たまには他の柄着たくなり 鶴女
青空で住みスモッグの地で稼ぎ 喜正
分譲地空の青さに契約し 和子

寝ころんで眼鏡はずした空の青
 ジェットコスター空から笑顔落ちて来る
 正義勝つ判決だった空の色
 凝っている落書時間かけて読み
 落書の時は上手に文字が書け
 落書も怪獣よほど好きと見え
 反抗期児の落書も乱れがち
 子が果立ち落書もない淋しさよ
 マンネリだなと落書を消している
 落書をそのまま垣をしてしま
 腕ずくの一步手前へ来た団交
 片腕にかけて着物の柄を選び
 待たされる間自信の腕が鳴り
 別れ道腕の温もりまだ残り
 初孫は腕から腕へ渡られ
 雨空をにらんで地下足袋腕を組み
 正座して腕組む若き名人位
 職人の腕べんちゃらが太嫌い
 風雪へ歩き続けた細い腕
 根性がないのに腕に昇り龍
 腕組みを解いた自信の胸の音
 吊皮を褒めたるパパと叱るママ
 落書を褒めてるパパと叱るママ

川柳たけはら

森井青居報

お世辞でも悪い気がせぬ子の噂
 白を着て白い彼女が笑わない
 若づくり母の見合いですあるまいに
 ラブレターいつもきれいな星と空
 核家族やっとな電話でつなぎ止め
 雑草を抜けば豊かな土の色
 蠅を追う見張り毒見の箸をとり

一栄 竹充 富久一 葵水 佳鳴 幸子 喜風 あいき 久子 清緑 誓二 六龍子 欣多郎 寿界 德里 蜂呂 清人 静歩 肖一 治二 醉夢 連夢

二次会になつて女を意識する
 はつきりと言われかえってさばさばし
 負け惜しみなどと言わずに聞いてお
 倅せは寄せる悩みに湧くフアイト
 鎌研いのでいて刈っても草は伸び
 日本の恥部とも思う休耕田
 しらじらしい弁解母は笑つて
 ゴールインしてから滝のような汗
 扇風機一人だけけるに首を振り
 長病みへ薬草じわじわ効いてくる
 初ゆかた着ればカラコロ下駄が鳴る
 新婚の友からあなたまだですの
 踏切へ赤い赤いカンナ咲く
 里帰り里の空氣のうまい朝
 アイヌ哀れイヨマンテでくらしする
 踊るほど酔えず子といる盆の月
 読経こんこんと涼しき炎天
 家中をこんこんと返して夏休み
 鈴が鳴る下駄へ仔犬がついてくる
 転動が子の友達をまたなくし
 湯上がり裸へ風がものたらす
 縁日の肩に乗る子の初ゆかた
 道案内かつてくだる京言葉
 夏草の茂み平和が風化する
 勿体ないオッパイたんときざかりて
 くだいなと言われながらも母として
 反抗期父には黙秘権をとる
 職変えて今年夏バテを知らず
 初盆の父をお浄土から迎え
 不景気な海へ直射の陽がまぶし
 標的にされ哀れる民間機

春子 五湖 村井季子 西合 春昇 大陸 洋江 令宏 雅鳳 清子 妙子 笑子 不動子 木瓜 文晴 不朽 千百合 かつ子 笹舟 鬼焼 こふみ 浄美 政己 房子 操子 貞子 蘭幸 凡女 美佐雄 静火

こわれそうな孫手の中で動きすぎ
 夕立で腹冷やすすなよ雨蛙
 美しい自然民宿のホタル狩り
 楽隠居なんと仕事を言いつかり
 怒ってるらしい長男静かすぎ
 漆の朱孤独日本は何処へ行った
 核心をそれじれつたい刻が経ち
 川柳わかやま 垂井葵水報

信じてはいるけど判を貰いたい
 ママ若いねと言う子の下心
 信じ合う二人に暗い帰り道
 信じてはいない手相が気にかかり
 純情さ裏切られても未だ信じ
 忠告を聞かず手管を信じてる
 信じない飾り言葉にある不安
 もう少し信じてほしい行状記
 飲んでいるときの忠告信じよう
 墓洗う水はお寺の池を借り
 王朝のデートもあった奈良の池
 濁流を呑んでも池は語らない
 石ばかり投げて気まずい池の岸
 ビニールのお池目高が泳いでる
 友訪えば自慢の庭に池も古り
 賑かな手づめで開通を祝い
 手打ちそば家もそのままだ目
 手打ちそばニッポンの味ここに生き
 手打そば喰わせる店の自動ドア
 国体へ若い力をぶつつける
 失言も若い二字で許される
 若い頃語る祖父の目嬉しそう
 スキー列車若い体臭むせ返る

静水 紫苑荘 天石庵 松緑 清太郎 青居 そのみ 守夫 千寿子 不也 増蔵 一光 太茂津 陽水 峻 弘生 春亭 みさお 四坊 一風 智司 久司 延伊知 喜一 まさお

寂光の古池女院悲話の跡
図書館の若さの中の好きな本
この辺で手打ちときめて席を立つ
明月をわが物にして池の月
古池に今宵も月が浮いている
この池でやっぱ蛙の子が育ち
千あがつた池に未練のかいつぶり
出勤のリズムに乗った若い靴
手打そばの親父仲々顔見せず
城北明会 川口弘生報
ポクロおとこコメディアン真面目
貧乏はホクロのせいにしてしま
笹竹が誉めたホクロに來ない運
犯人のホクロを孫が覚えて居
口元のホクロに幸運信じてこみ

幸運なホクロが乗せた玉の輿
脇腹のホクロ迷子の役に立ち
双生児背なのホクロは母が知り
寝たきりで朝顔のかず孫に聞く
指角力孫の手食べてしまいたい
ふるさとのチームが勝てば力み出し
毒舌がとうとう平で定年す
主婦連は不買で業者の首をしめ
捨て石になって社運に賭けてみる
和歌山短詩型文学クラブ 中筋三幸報
ライバルがさらりと祝電呉れている
祝電を打って三年の想いたち
祝電を受けて招かぬ事を悔い
義理で打つ電報勸定先に立ち
弔電に雪のきそうな空となり
其夕

弔電も打てぬわが胸だけの人
弔電は以下同文で読まれけり
祝電の待ちたる部屋に通される
あつかまし電報為替で金送れ
祝電を読み上げ会をひきしめる
祝電の一つ花嫁泣かしたり
うつむいて弔電を見る固い膝
本文を何度よんでも金送れ
和歌山短詩型文学クラブ 三幸報
国なまり抜けぬ律儀が気に入られ
来客の訛りのままに取次ぐ子
コップ酒訛りで語る浮き沈み
あてにした先方も手形になる不況
教養と理屈で不況乗り切れず
くらしきの集い

雅号ぶっちゃけばなし (90)

やよい



宮西 弥生

みやにし

入院の動機で始めた川柳なので、どうせ長
続きはしないだろうと柳名なんてとんでも
ないと気にもかけませんでした。それでも句会に顔を
出すに至っては、名無しの権兵衛様では恰好がつか
ず、そうかと云って名前をもらえば義理にも止めるこ
とも出来ず結局、自分で考えた方が、一番気楽だと思
って、生まれ月の弥生に決めました。それ以来、本名
よりも柳名が好きになり、秋よりも春が好きになっ
りしてどうもおかしなものです。川柳学となれば柳歴
の割りに何時までもおたおたと迂回ばかりしているよ
うに思われて時々情なくなる時もあるのです。

(ファッション・デザイナー)

グロップの中の拳の傷だらけ
鞭の音ばかり聞こえる月曜日
本音吐きそうで慌てている煙
百合に咳かれて哀しみの舟がつく
灯台に水有難し二度つかう
この辺で一と休みする岩清水
備前米と添わず水あり桶どころ
この拳だけが哀しい桶である
たたみの中に女の拳がある
秋の旅傷つく人が海に付つ
夜火事見てコップの水をグッとむ
人形の拳というもあるものを
山茶花が咲いても亡母はかえらない
振り上げた拳木馬は止まらない
▼なるべく句は十六字以内のものを
ださい。(編集部)

本社二月句会

日時 二月 七日(月) 午後六時
会場 以和貴荘(いわきそう)

阿倍野区松崎町二丁目
電話 622・1275番

兼題 「ジャンプ」
「叩く」
「美容食」
「脱乳」

席題 二題 当日発表
会費 二百円

★投句だけの方は切手50円封入

若本 多志
兄島 与呂志
橘高 薫風
西田 柳宏子
正本 水客
各題三句以内厳守

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷仲之町20

川 柳 塔 社

3月の兼題 「舌」 「食い違い」
「ワキ役」 「ルート」

賀 状 を 各 方 面 か ら
た ま し わ り 厚 く お 礼
申 あ げ ま す
川 柳 塔 社

・ 募 集 ・

四月号発表(2月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園選
課題吟(各題5句以内)

「新 人」 河井 庸佑選
「資 金」 西尾 青一路選
「絵ハガキ」 石倉 旅風選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

五月号発表(3月15日締切)

川柳塔(10句) 西尾 栞選
近作柳樽(10句) 菊沢 小松園選
課題吟(各題5句以内)

「交 人」 河原 みのる選
「ラーメン」 西岡 洛醉選
「底」 太田 良子選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字
は楷書で新かなづかいにしてください。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般

合資 西出螺子製作所

大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL 06 3451-14
夜間 06 4408

寒中お見舞い
申しあげます

定 価 百八十円(送料十六円)

半年分 千七百七十円(送料共)
一年分 二千二百円(送料共)

昭和四十七年一月二十五日印刷
昭和四十七年二月一日発行

編集 大阪南区鰻谷仲之町二〇番地

発行人 中島 蓬太郎

印刷所 大陽印刷株式会社

郵便番号 五四二

大阪南区鰻谷仲之町二〇番地

発行所 川柳塔社

電話 大阪・七二一三九八五番
振替口座 大阪・三三六八番

・ペンペン草・

る。

★新年号を十日ほど前に送本したのに、早や二月号の後記だ。時の過ぎるのがおそろしい。新年号の出来たのが、いつもより三日も遅れたので気が気でなかった。主筆権を印刷所に握られていたのだからどうしようもない。

★時は金なりーという。この「時」を痛切に感じるのは送本前後のイライラであ

★ほくなど、時は金なりというほどのかせぎをしたことはないが、雑誌の仕事には盆も正月もなくはたらい

★起床、就寝、食事の時間はきめていない。一日一食の日もあれば一日四食の場合もある。雑誌の発送日と、旬会などの日には「時間」の命令どおりに活動するが、それ以外は時があつて時のない生活をしてい

★テレビの放送料金は60分間Aクラスで百十三万円。5分間で三十万円だ。Dクラスで5分間九万円だそう

★十二、三年前、ラジオ大阪の「歌はよみがえる」という、映画主題歌をテーマにしたディスク・ジョッキーを構成したことがある。

★これを書いているペンは秋田実先生からお年玉にいただいた21金の万年筆である。原稿紙を走るペンの音を先生の叱咤の声とした

★葉子コーナりの名づけ親は岸本豊平次氏である。

疲労・肩こり・神経痛に

アリナミンA

☆5ミリ錠・25ミリ錠があります

☆食後すぐのものが効果的です

☆くわしくは医師や薬局・薬店で



葉子コーナー

▼お人柄がしのばれるのが絵入りの年賀状。やっぱり一行でも自筆を拝見すると心が温まりますね。▼嫉のかほるちゃんはおシナ鼠を描いてくれましたが、今年こそはネズミ算で句を生みたいものとおもっています。

る。だが、原稿の締切など一回も迷惑をかけたことがないから根っからのなまけ者でもないのだろう。

★漫才の横山やすしは、暴力事件以前までは月六十回はテレビ・ラジオでかせぎまくったが、事件以後は一回も出演していない。(こ

★テレビの放送料金は60分間Aクラスで百十三万円。5分間で三十万円だ。Dクラスで5分間九万円だそう

★十二、三年前、ラジオ大阪の「歌はよみがえる」という、映画主題歌をテーマにしたディスク・ジョッキーを構成したことがある。

★これを書いているペンは秋田実先生からお年玉にいただいた21金の万年筆である。原稿紙を走るペンの音を先生の叱咤の声とした

★葉子コーナりの名づけ親は岸本豊平次氏である。

★ラジオの放送料金は30分

明日のくらしの コンサルタント



アベノ店



上本町店



アベノ店621-1231・上本町店779-1231

間十五万円。5分間五万円。これはAクラスである。日曜日のAクラスは8時から18時までと、22時から0時まで。(72 DIARY

その執筆陣にはS・Fの大家、小松左京氏がいた。一年四か月つづいたが、実にやせるおもしろい連続で、きびしい「時は金なり」を味わった。

★十二、三年前、ラジオ大阪の「歌はよみがえる」という、映画主題歌をテーマにしたディスク・ジョッキーを構成したことがある。

★これを書いているペンは秋田実先生からお年玉にいただいた21金の万年筆である。原稿紙を走るペンの音を先生の叱咤の声とした

★ラジオの放送料金は30分

★葉子コーナりの名づけ親は岸本豊平次氏である。

(不二田一三夫)

昭和四十七年一月九日 第三種郵便物認可
 昭和四十七年二月二十五日 発行(毎月一日発行)
 創刊大正十三年 通巻五三七号

川柳塔 二月号



ワンカップ大関

大関酒造株式会社

コップにはいったお酒

清酒一級(180ml) 100% ジャケットバック5本入り



田宮二郎

人気と実力で独走中



豚饅・焼売・焼餃子



大阪・なんば

TEL (641) 0551~2

出張販売店

なんば高島屋/虹のまち鹿鳴/心斎橋そごう/梅田阪神/天満橋松坂屋
 京阪デパート/堂島地下センター/弁天阜頭支店/中之島サン・ストアー

定価 百八十円 (送料十六円)